



平成20年8月20日発行



発行 香川大学医学部医学科同窓会讃樹會  
〒761-0793 香川県木田郡三木町池戸1750-1  
Tel/Fax 087-840-2291  
E-mail dousou@med.kagawa-u.ac.jp  
http://www.kms.ac.jp/~dousou/  
発行人 高橋 則尋  
編集人 大森 浩二  
印刷所 株式会社 美巧社

## 巻頭言

### 時には別世界を覗いてください

前香川大学医学部附属病院長  
JA香川厚生連 理事長  
長尾 省吾



私は今時間の合間を見ては四国88ヶ寺遍路の旅に出ています。この貴重な機会を得て私が肌で感じたことを同窓会の先生方にお伝えしたいと思います。

私は大学卒業後、約40年間脳神経外科を専門とし多くの方の手術に立会い、また疾病の性質上たくさんの方をお見送りしました。最近では志を一にする同僚を送る辛い思いも致しました。研究のためとはいえ多くの実験動物を犠牲にしてきました。それらの心の重荷が長年心底にたゆたって居り、それが私を自然に遍路の旅に足を向けさせたのでした。

いくつかの寺を訪れると気付くことですが、お寺それぞれに歴史と自然の懷に抱かれた独特な霊場の雰囲気があり、山門にたたずみ一礼したとき、はっとする靈感に包まれ肅然と致します。何百年前から老若男女が自分の生きる道を求めて山門をくぐり、そして一心に仏の導きを祈願してきた時の流れが霊場の荘厳な雰囲気をかもし出しているのかも知れません。時あたかも春から初夏にかけての巡拝でしたが、ご本堂、大師堂に続く参道、石段の周りには山桜、石楠花、しゃが、山椿などが新緑の木漏れ日の中でよく来ましたねと言わんばかりに迎えてくれ、心のわだかまり、欲も得も自分の意思さえも忘れさせてくれます。仏前にぬかずきお経をお納めする時には、心の中は私が居ない無を感じることもありました。

医学、医療の中で無我夢中に過ごしてきた毎日が遠い昔の出来事のように感ぜられ、ああ・・・このような世界があったのだと新しい発見と幸福感に満たされています。

このような新しい体験をしてつくづく感じることは、なぜ今の日本はこんなに住みにくい国になったのだろう、人々は己のためになぜこんなにあくせくするのだろうと言うことです。何かの本に書いていましたが、日本人が古くから美德として受け継いできた、ほどほどでよい、中庸の心と向こう三軒両隣の痛みを分かち合う助け合う心を失ったか

らでしょうか。かく言う私も教室や病院の運営の中で自分の胸に手を当てて考えると忸怩たるものがあります。その時はその道を行かねばと義務と責任感にかられ必死に邁進してきましたが、ある意味ではご迷惑を多々お掛けしてきたことでしょうか。このように感じるのも時間にゆとりが出来て、遍路の旅によって少しは今までとは異なった立場で自分を見つめる機会があったからだと思います。この様に書いてきますと、私も随分線香臭くなってしまったと思われるかもしれませんが、申し上げたいのは私を含め先生方の世界と価値観が全く異なる世界があり、時には故栗山教授が達観されたように静に己の心と向き合う時間も必要であるということなんです。

ここで現実に帰り、指導的立場にある先生方に激励をお送りします。現在、医療の世界は終始一貫しない医療行政、経済的締め付け、コンビニ医療と言われる受療者の無理難題と過大な医療レベルの要求、医療インシデントに対する世間の厳しい目、それにも関わらず医師に対する低い経済的社会的評価などが先生方のやる気をそぎ、医学医療発展にかける高揚心を萎えさせています。今冷静に社会の動きを見ていますと、人々が疾病を克服し健康で社会生活をおくれるのも医療人の献身的な奉仕、支えがあってこそということがゆっくりですが浸透してきているように感ぜられます。特に勤務医の疲弊に対する社会の理解が少しずつですが深まっています。近い将来何らかの光明が見えてくると信じています。どうぞ若い次世代を背負う医師達を‘相棒’にして医育に引き続き力を入れていただきたいと存じます。今は辛く身の置き所が無いくらい悩まれている方も居られると思います。もう少しの辛抱です。時には時間を作って、私がこの歳で初めて経験した全く価値観の異なった社会にも目を向け、リフレッシュして教育医育に当たっていただきたいと切望しています。



## 会長就任のご挨拶

## さらなる飛翔へ



讃樹會会長 高橋 則尋

過日の平成20年度香川大学医学部医学科同窓会総会において、同窓会会長の信任を頂きました。今後2年間、微力ではございますが、同窓会および同窓生のために尽力したいと思います。よろしくお願ひします。

まず、前回任期中の平成18年度、19年度を振り返ってみますと、同窓会活動20年を成人にたとえ、大人としての自覚を持って行動したいとお約束しました。何とか、同窓生皆様のご協力の下に同窓会活動が全うできたと思います。その中で、特に印象深いのが、同窓生の本学教授就任でした。まず、平成19年2月、8期生の西山 成先生が薬理学教室の教授に就任されました。その後は堰を切ったように、平成20年4月、5期生の正木 勉先生が消化器・神経内科学教室、平成20年5月、5期生の西山佳宏先生が放射線医学教室の教授に就任されました。このことは初代会長濱本龍七郎先生とともに悲願であったために、まことにうれしく思われました。本当におめでとうございます。晴れて教授となられた先生方には本学のため、また同窓生のため、ご活躍いただきたいとお祈りしております。

次に、石田俊彦教授および松原修司専任講師をはじめ、研修センターにかかわられる先生方、同窓会役員、本学附属病院に働く多くの同窓生のご協力の下、この2年間の卒後臨床研修制度の充実振りには目を見張るものがありました。院内外の先生方からも高く、高く評価されております。この件につきましても、私自身の同窓会活動の中心課題としておりましたので、充実した卒後研修の実践という成功を母校が手にすることが出来、皆様に感謝したいと思います。本年度のフルマッチという成功を確かな手応えとして、来年度以降も同窓会としても卒後臨床研修センターのお力添えをさせていただきたいと思ひます。

顧みますと、厳しい予算の中ではありますが、同窓会理事会の皆様のご協力のもと、従来どおりの同窓生や準会員である学生の皆様への臨床、研究、研鑽にかかわるサポートも順調に行うことが出来ました。

さて、今後の任期中の2年間は今まで報告してきました同窓会活動を持続し、さらにパワーアップさせていきたいと考えております。具体的には予算配分を強化し、同窓会活動にかかわる先生方が働きやすいようにバックアップしていきます。つきましては同窓会のさらなる飛翔へ、皆様のご協力を何卒、よろしくお願ひします。

以上、会長就任のご挨拶に代えさせていただきます。

## CONTENTS

巻頭言……………	1	特集／医学部新学部長・副学部長を迎えて……………	12	研究助成・国外留学助成結果……………	24
会長就任挨拶……………	2	第10回定期総会開催報告……………	16	支援 研修医支援事業……………	25
同窓生教授就任挨拶……………	3	19年度会計報告及び20年度予算……………	18	学生の国際留学助成……………	26
退官教授挨拶……………	6	理事会議事録……………	20	支部会／同期会……………	28
就任挨拶……………	9	Series 教授の横顔……………	22	学内ニュース……………	30
				事務局からのお知らせ……………	39
				診療科だより……………	40

## 同窓生教授就任挨拶

### 遠回りした自分を 振り返って

香川大学医学部 消化器・神経内科学  
教授 正木 勉 (平成2年卒)



この度、平成20年4月1日付けをもちまして医学部消化器・神経内科学講座の教授を拝命いたしました。これも、ひとえに同窓会の皆様の応援の賜物だと深く感謝しております。

私は、香川県のさぬき市長尾の出身であり、地元の長尾中学を卒業し、海の潮のにおいのする津田高校に入学しました。その後、だいぶ遠回りをし、その遠回りを詳細に述べるならば、在籍していた東京にある大学を中退し、医学部再受験のため、退学届けを出し、帰郷し、3年もの長い間浪人生活をしておりました。せめて卒業だけはして欲しいという母の願いも顧みず、帰郷した時、母は、涙を手でぬぐいながら、「おまえ、敗残兵みたいやな、これからどうするん?」と言われ、「香川医大に進学し、医者になる」と返答した際、母は、さらに寂しそうに、下をうつむき、「おまえには、無理や」と言われたことを記憶しております。それから、3年後、昭和59年の春、やっと念願の香川医科大学に入学いたしました。その時は、泣きはしませんでした。母の満面の笑みを今も忘れることはできません。私の浪人時代、できの悪い息子に対する母の深い愛情がなければ、現在の私はなかっただろうと確信しております。昨年2月に逝ってしまった亡き母は、私の教授就任を遠いところから大変喜んでくれているのではないかと思います。

香川医大卒業後は、消化器内科に興味があったので、最初の恩師である西岡幹夫先生が主宰していました第3内科(現消化器・神経内科)に入局しました。研修医とはいえども、年齢は32歳になっていましたが、それでも、内視鏡、エコーを巧みに操れる良い消化器内科医になろうという夢と希望を持って、現在の消化器・神経内科病棟であった西7階病棟を駆けずり回っていたと記憶しております。当時、西7階病棟は、現在と同様、極めて忙しく、特に肝細胞癌患者が、入院患者の約半数を占めている状態でした。それが、まさしく当時の消化器病棟の風景でもありました。その頃の肝臓の予後は極めて悪く、5年たてば、現在入院している患者の7割はこの世からいなくなるという状況でありました。また、肝臓の主たる原因がC型肝炎ウイルスであることが判明したのも、この頃でありました。そのような状況下の中、自分は、特に消化器病のなかでも、この予後の悪い、大学での患者数の多い肝細胞癌の臨床を自分の専門にしようと決意し、その思いが現在まで続いている状態です。

研究面におきましては、平成3年から3年間、第一生理学教室(現在の細胞情報生理学)の徳田雅明助手(現教授)の下で、基本的な実験手技を叩き込まれました。その後、平成8年から2年間、東京大学消化器内科の小俣政男教授の下に国内留学し、臨床をより良くする為に基礎研究を行なうのだという姿勢を教えられました。その後、香川に帰り、平成13年に、亡き恩師栗山茂樹先生と出会い、臨床に軸足を置きながらも、基礎研究も継続しておりました。栗山先生が、香川に来てすぐに、笑みを浮かべながら「正木君、論文書くスピードが遅いで」と言いながら、「No job is finished till the paperwork is done!!」という文章が書かれた1枚の用紙を手渡してくれました。このことからわかりますように、栗山先生からは、研究で得られた情報は必ず世界に発信させるのだという強い意思を教え込まれました。その言葉が印刷されたプリントは、今も私の教授室に掲げられ、私の座右の銘となっております。

最近、教室の若い研修医、医局員と教授室で雑談をするとき、自分の好きな仕事を、こつこつと持続していくことが、成功の秘訣かもしれないと述べております。私も、これまで、困難なことが、何度もありましたが、自分の好きな研究、臨床に進んだためか、幸いなことに、仕事を仕事として思ったことはありませんでした。そういうわけで、若い教室員、後輩には、消化器関連の中で、自分の興味ある研究(基礎研究、臨床研究は問わない)を早く見つけ、その仕事を継続し、得られた成果は、世界に発信せよ(必ず論文にせよ)と恩師栗山茂樹先生が私に申されたことと同じことを言っております。自分の興味ある分野で自分の身をおけば、案外苦にならず楽しく仕事ができ、その中から生まれてきた成果を世界へ発信させる作業こそが、近い将来、各自の成功につながる最短の道であると考えているからです。

最後になりましたが、今、自分のこれまでを振り返り、すばらしい仲間、先輩、後輩、そして恩師に出会え、ほんとうに幸せであったと感じていると同時に、その方々に深く感謝しております。今度は、私が、母校のため、後輩のため、教室員のため、そして同窓会のために力の限り尽くす所存であります。

今後とも同窓会讃樹會の皆様の一層のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

#### 略歴

平成2年3月	香川医科大学卒業
平成6年6月	香川医科大学大学院医学研究科 形態・機能系修了
平成8年12月	東京大学消化器内科客員研究員
平成11年4月	国立療養所高松病院内科医員
平成13年7月	香川大学医学部第三内科助手
平成17年12月	香川大学医学部消化器・神経内科講師
平成20年4月	香川大学医学部消化器・神経内科教授

## 今後の放射線医学への抱負

香川大学医学部 放射線医学講座

教授 西山 佳宏 (平成2年卒)



香川大学医学部医学科同窓会讃樹會の皆様におかれましては、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

平成20年5月1日付けで香川大学医学部放射線医学講座を担当させて頂いております。少し過去を振り返り、また今後の抱負について述べさせていただきます。

私は平成2年に香川医科大学(現香川大学)を卒業し、その年に田邊正忠教授が主宰されていた放射線科に入局しました。その理由は田邊先生がクラブ活動の顧問だったことです。入局後、決まった進路は無くその後何をするかは決めておらず、漠然と放射線治療を行いたいと思っていました。そして大学卒業と同時に、香川医科大学大学院医学研究科に入学し、温熱療法の治療効果判定の研究テーマが与えられました。私が放射線治療を行いたかったかどうかは知りませんが、医局の指導教官が放射線治療を専門に行っていた高島先生でした。しかしその効果判定を行う方法が核医学のTI-201を用いた腫瘍シンチグラフィでした。目的も分からず実験腫瘍をネズミに移植したり、その実験腫瘍に放射線治療や温熱療法を行い、動物の癌治療を行っていました。そして、学会発表を行いました。その結果は高島先生が統計解析などを行ってくれ、自分で行ったことは動物の世話をしたぐらいでした。しかし、偶然にも学会のポスター賞を頂き、周囲の自分を見る目が変わったのかしれませんが、私は放射線科の中で核医学が専門になりました。その後、魔女とも思えるような優秀な伴侶を見つけることが出来ました。その甲斐あって学会発表や論文発表がいくつか出来ました。しかし、卒業後約10年して、大学病院での診療が何となく物足りなくなり、気力も無くなり他の施設に移ろうかと考えていました。理由は京大、阪大では最先端の放射線診断・治療装置があり、例えばPETを用いた癌診断の有用性の報告などが学会で発表されていましたが、香川大学の核医学のレベルはSPECTどまりでどんなにがんばっても相手にされないという、一人ですんでいた心境でした。当時PETは大嫌いでした。

その時に香川大学病院にPETが導入されるという話があり、瞬く間に導入・設置が決まり、平成14年に臨床稼働が始まりました。しかも中国四国地方で初めて、新設医大では福井医大に次ぐ2番目の早さで、あれほどまで嫌っていたPETが香川大学に設置されたとなれば、頑張らなければと思いました。心がけたこ

とは他科の先生方と一緒に保険診療内でPET診療を香川大学のために役立てられるようにすること、そしてたくさんのPETトレーサを合成し地方大学にもかかわらず頑張っているなど他施設の先生方に認めてもらえることでした。また、学生にはPET診療は非常に興味深い領域であることを伝えるようにし、目標は香川大学のMr. PETになることでした。偶然に香川大学にはPETを専門に行う放射線科医はいなかったもので、この目標は達せられたと思います。もう一人、伴侶が同時に香川大学のMs. PETになっているので、自慢ではありませんが国内、あるいは世界的にもPET水準は高いと思っています。

今後の抱負はこのPET診療を分子イメージングとして益々発展させたいと思います。分子イメージングとは生体内で起こっている様々な分子生物学的情報を可視化する技術のことで、PET、MRI、蛍光イメージングなどが含まれます。PETを用いて生体内の様々な分子情報を可視化したいと思います。癌、アルツハイマー型認知症、心臓疾患の分子イメージングなどPETを用いた分子イメージングには限りない可能性があります。アミノ酸、核酸、アミロイド、細胞膜代謝トレーサなどPETにはたくさんのPETプローブがあり、PETにはプローブの数だけ夢があります。夢と目標は違いますが、PETを使って夢が目標となるように頑張ります。同時に私は香川大学のMr. PETになれましたが、今後は日本の、世界のMr. PETやMs. PETになれるような若く優秀な放射線科医を育てたいと思います。

放射線科の業務は画像診断、放射線治療、核医学診療であり、その業務は病院内の関係診療科と緊密な連携を有する中央診療部門であり、かつまた中心的な役割を果たさなければならない重要な任務を持っています。今まではPETだけに注目していれば良かったわけですが、今後は核医学以外の画像診断、放射線治療、そして後進の指導という重要な役割があります。一人でも多くの卒業生が香川大学の放射線科医として一緒に働ける職場環境になれるように、微力ながら頑張りたいと思います。また、大きくは香川大学の発展のために少しでも寄与できるよう頑張りたいと思います。

### 略歴

平成2年3月	香川医科大学医学部医学科 卒業
平成2年4月	香川医科大学大学院医学研究科 入学
平成6年3月	香川医科大学大学院医学研究科 卒業
平成6年4月	香川医科大学(現:香川大学医学部)放射線科助手
平成18年2月	香川大学医学部放射線科講師
平成19年2月	香川大学医学部放射線科准教授
平成20年5月	香川大学医学部放射線科教授

## スポーツ医学のご紹介



日本体育大学大学院  
健康科学・スポーツ医科学系

教授 成田 和穂 (平成8年卒)

このたび本年4月1日付けをもちまして、日本体育大学大学院健康科学・スポーツ医科学系教授に就任いたしました。この場をお借りして、皆様にご挨拶をさせていただきます。

私は平成8年に香川医科大学を卒業し、第2内科(現循環器・腎臓・脳卒中内科)に入局しました。同時に入学した大学院で心疾患や生活習慣病の運動療法の研究をしていくうちにスポーツ医学に対する興味が広がり、大学院修了後、より実践的な勉強をしようと慶應義塾大学に国内留学しました。慶應ではプロスポーツ選手や国体選手のメディカルサポート、肥満症の食事・運動療法の手法などについて3年間勉強させていただき、内科領域のスポーツ医学の重要性を改めて認識しました。

その後、香川大学に戻り、附属病院での臨床の傍ら、中高年者の健康づくりのための運動療法の研究や、県内の様々なスポーツ行事や国体の香川県選手団のサポートなどを行ってきました。こうした活動やこれまでの業績を評価いただき、今回、学半ばの身でありながら、次代の体育・スポーツ指導者を目指す学生の教育と研究指導を担当することになりました。大変光栄であると同時にその責任の重さを痛感しております。

日本体育大学は、1893年(明治26年)に創立された日本体育会体操練習所に始まる今年で創立115年を迎える歴史のある体育大学です。単科の体育大学ですが1学年4学科(体育学科、健康学科、武道学科、社会体育学科)合わせて1200余名の学生がおり、人数的には香川大学全学部の1学年の学生数とほぼ同じです。キャンパスは東京世田谷と横浜の2カ所にあります。

皆さん、日体大と聞いたら何をイメージされますか。まずはオリンピック選手などのトップアスリートを思い浮かべられるのではないのでしょうか。卒業生の中には数多くのメダリストがおり、今年の北京オリンピックにも水泳の北島康介選手や柔道の谷亮子選手など30名近い卒業生・現役学生が出場します。また、お正月の箱根駅伝は今年で60回連続出場し、過去9回優勝しています。

一方、日体大というと「体育の先生」を思い出される方も多いかと思えます。実際、日本の公私立の中学・高校の体育教員の約半数は日体大出身者です。現

在も体育教員を目指して入学してくる学生が多いのですが、近年、少子化の影響で教員の採用人数が全国的に減少してきており、教員になれるのは卒業生の約1/4です。そのため最近では、医療・介護・福祉の現場や、公務員、一般企業に就職する者も増えてきており、卒業生はいろいろな分野で活躍しています。

さて、スポーツには筋・靭帯・骨・関節の障害や外傷がつきものです。このため、「スポーツ医学」と言うと、整形外科をイメージされる方が多いようです。しかし、近年、運動中の心臓突然死や熱中症、一次救命処置、ドーピング・コントロール、スポーツのためのメディカルチェックなど、安全に運動・スポーツを行うために知っておかなければならない内科的なテーマも増えてきています。日体大の学生は、将来、体育教員、プロ・アマのコーチや監督、職域や地域のスポーツ指導者などになる者が多いため、まずはこうしたテーマの教育に力を入れていこうと考えております。また、今後は特定保健指導などでハイリスク者の運動指導に携わる者も多くなるため、内科系スポーツ医学の教育責任者として、より臨床的な内容にカリキュラムを改変していくことも検討しております。

研究面では、これまで行ってきました心疾患や生活習慣病の運動療法だけでなく、体育大学の特性を生かした運動生理学的研究も開始しました。また大学院教員として、学内外の研究者と共同研究を企画して院生の研究のフィールドを広げ、マネージメントも含めて大学院の研究環境を充実させ研究のレベルアップを図っていくことも重要な責務と考えております。

スポーツ医学は、競技スポーツによる障害の予防・治療のための医学としてスタートしましたが、今や健康管理、生活習慣病、食生活・身体活動など、幅広い分野をカバーするようになってきました。今後は、競技スポーツの選手や指導者を意識したスポーツ医学にとどまらず、健康科学としてのスポーツ医学の教育・研究を通して、広く社会に貢献していきたいと考えております。同窓の皆様のご指導ご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

### 略歴

昭和57年3月	東京理科大学薬学部卒業
平成8年3月	香川医科大学医学部卒業、第2内科(現循環器・腎臓・脳卒中内科)入局
平成12年3月	香川医科大学大学院医学研究科(生体制御系専攻)修了
平成13年7月	慶應義塾大学スポーツ医学研究センター助手
平成17年4月	香川大学医学部附属病院検査部(循環器)助手
平成19年3月	香川大学医学部附属病院検査部(循環器)学内講師
平成20年4月	日本体育大学大学院教授就任。専門:スポーツ医学、運動心臓病学

## 退官教授挨拶

### 心臓カテーテル治療の 思い出

元物理・基礎放射線学教授

立川 敏明



それにしても、たいしたものである。香川大学医学部附属病院心臓内科心臓カテーテルチームのことである。

小生の定年退職1年4カ月前（平成18年11月末）の出来事である。夕食後1時間程した午後9時頃、突然、インターバルトレーニング中の、全力疾走時のような「しんどい」状態に、寝ても起きて、体位をどのように変化させても襲われた。救急車で運ばれて、大学病院の救急部の診察でついた病名は、心筋梗塞であった。かくして、放射線科内の一室で、X線装置が小生の身体の上方で動き回る手術台の様なベッド上（以下手術台と呼ぶ）で、12時前に上記心臓カテーテルチームの医師達との最初の出会いがあった。その手術台で、彼等からその後約1時間程の救急治療を受けたが、治療が終了するまでの間「しんどい」状態は継続したが、意識は正常であった。ここに記述する思い出は、その時の記憶を中心に感謝の意を込めた経過報告である。

まず、雪入医師から、冠動脈狭窄部にこれから心臓カテーテル治療を行うので異常があれば伝えて欲しいとの開始宣言があり、次に、大原医師により、局部麻酔処置の後右股関節部動脈からカテーテルが挿入された。彼女のソフトで優しさを感じさせる挿入時のファーストタッチは、直感的に、今回のカテーテル治療の成功を小生に感じさせる（命が助かったと思える）印象深いものであった。その後は、時々造影剤の挿入を伝える大原医師の声と雪入医師によるその時点での小生に気分を問いかける声の他は、X線カメラが動き回る音、左腕にセットされた血圧計と酸素濃度計が定期的に作動する音などが聞こえた。他方、冠動脈内でのカテーテルの存在感は無いので、カテーテル先端の位置などはX線カメラモニターを見ていない小生には分らなかった。やがて、ステント内バルーンが加圧される旨が伝えられ、ステントが血管狭窄部にセットされた。バルーンの減圧時は心筋梗塞を起こしている血管狭窄部を血液が再流する時らしく、胸部が熱く感じる旨を告げられた。その言葉どおりに熱く感じられ、これで、生死の境界から生への帰還が完了した。最後に、雪入医師から心筋の一部が壊死している

ので、十分注意するように告げられて救急心臓カテーテル治療は終了した。後には、苦しかった「しんどさ」は消え、その余韻のけだるさが残った。

壊死した一部の心筋に対するリハビリは、心臓に対する負担の関係から、約2週間かけて寝たきり状態から病院内散歩ができる状態までとなる。カテーテル処置後10日ぐらいの時、今回の狭窄部が右冠動脈の中下流で起き、幸運にも狭窄により壊死した心筋は10%以下であるが、左冠動脈上流でも8-9割の別の狭窄が起こっていることが告げられた。リスクを避けるため、リハビリ期間が終り次第、再度左冠動脈にカテーテル・ステント治療を行うことになった。2度目のカテーテル治療も、雪入・大原両医師を中心にして行われたが、「しんどさ」や痛みもなく無事終了し、最初の日から数えて、都合20日で退院できた。病院内では、術後最初の半日だけ救急室に居たが、その後は個室病棟が当てられ、骨休休暇のような快適な日々が過ごせた。

以上、ここでは手術台で直接コンタクトのあった両医師との応対を中心に紹介させて戴いたが、X線室内には放射線科のスタッフや室外から透明窓ガラス越しに一部始終を見て、予期しない事態に対応に備えていた心臓内科スタッフ、さらに、ここに運ばれて来るまでに事前処置や診察を行ってくれたスタッフ等多数の医師・看護師達の存在があった。彼ら全ての人々に感謝する次第である。最後に、退院後の1年以上に渡る定期の病院診察をして下さった河野教授に謝意を表します。

### 教員生活を振り返って

元法医学教授

井尻 巖



私は昭和62年4月に恩師の急逝で母校の熊本大学に帰られた恒成教授の後、初めての二代目教授として川崎医科大学から本学に赴任し、本年3月31日に定年で退職した。法医学の医系教員は少数で、後任の選考は難航したが、4月の教授会で本学出身（7期生）の兵庫医科大学法医学教授木下博之君が選考された。しかし前任地の都合で採用は来年の1月1日付けとなり、この間非常勤講師として解剖実務や講義の一部を担当している。赴任した当時は基礎系講座に多数の本学出身者が大学院生として在籍し活発な研究生活を送ってお

り、他の大学で見られない実態を見て基礎系講座の教官の熱意を大いに感じたものである。ただ残念なことは基礎へ入る卒業生が年々減少していったことである。

法医学には教育、研究だけでなく法医解剖の実務がある。赴任当時は年間の解剖数は30体前後であり、余裕のある大学生生活を送れた。しかし、外表だけで検視を終えた事例に犯罪死体が多く含まれていたことから、警察も慎重となり全国で解剖数が年々増加してきた。香川県でも最近では年間100体を越える解剖数となり、解剖に明け暮れる毎日になっていた。このため、学会には常に呼び返されることを覚悟で出張し、旭川や金沢をトンボ帰りしたこともあり、また学会の途中で帰ったり遅れて行くことも数限りなかった。また、教室員には大変迷惑をかけたが、休日にも出勤し多数の解剖を行った。今に思えばこのようなことも決して苦ではなく、法医学の宿命と思い、当然の様にやっていた。このことは香川県警と深い信頼関係が築かれ、解剖等の実務は実にスムーズに処理され、香川の地方貢献には大いに関与してきたと考えている。

赴任1年目を除いて、その後は1～2人の本学出身者が途絶えることなく大学院生や助手として教室に入り、これらの先生方に助けられ大過なく過ごせたものと非常に感謝している。しかしながら、大学院卒業後教室に籍がなく臨床へ行かれたことが非常に残念である。今日、全国的に基礎系の教員の定数が減らされている。法医学や病理学のように実務を行っている教室では、教員の削減は1人の教員の負担が大変なことになる、実務の縮小にもつながる。解剖診断は医師以外ではできないのが現状であり、また、正確な診断ができるのに経験が必要である。臨床医と同様に解剖医の養成には多くの時間を要することが、社会的に未だ容認されていないことは誠に残念なことである。幸いなことに法医学に従事している本学出身者は教授2人、准教授2人、助教1人を数え、法医学会では香川大学出身者は他大学に比べ多くを占めている。

最近、婦人科医や小児科医の少ないことがマスコミで取り上げられている。しかし、現実には外科系を志望する医師も少なく、ましてや基礎系を志望する人はほとんどいない。最近の若い人達は金銭が優先され、楽な領域に入ろうとする傾向が強く見られる。私達の時代には実力の発揮できる外科系や基礎医学に多くの人が入り、全国でこのような人が大いに活躍している。現在の学生さんのなかには6年生になっても進路に迷い、先輩などの言動に左右されている人も少なくない。医学部に入った以上、早い時点で自分の進路を決め、周りの雑音に惑わされずしっかりと自分の意思を持ち、将来に向かって邁進することを切に希望する次第です。

## 私の40年

元放射線医学教授

大川 元臣



平成20年3月をもちまして香川大学医学部を定年退職いたしました。昭和43年に医師免許を取得して以来40年間を放射線科医として勤めたこととなりますが、この40年間は放射線医学が目覚ましい進歩を遂げた激動の時代でもありました。この間に岡山大学から大阪大学へ、さらに大阪府立成人病センター、香川医科大学へと3度の移動を経験しましたが、移動したそれぞれの施設で新しい放射線医学の流れを経験することができ、幸運であったと思います。

香川医科大学には昭和58年の附属病院開院の年に放射線部の助教授として赴任し、それ以来25年間を放射線科医として勤務しましたが、これは私の医師としての経歴の半分以上を勤務したことになります。

附属病院開院当時は放射線科の医師は田邊正忠教授以下7名、診療放射線技師も7名というこぢんまりとした所帯でしたが、それぞれに第一線の施設での豊富な臨床経験を持ち、新しい放射線科を立ち上げるということに熱意や意欲を持っていました。開院当時の放射線部の診療装置についてみてもCT装置すら導入されていない状況でしたが、3年計画で新たな装置が次々と導入され、3年後には診断・治療・核医学にわたる一応の装置が導入され、新設医科大学放射線科としての一応の体制が整い、当時の田邊教授の方針であった放射線を扱う診療は放射線科が主体となって行うという方針のもとに全員が一致団結して広い範囲の放射線診療に力を注ぎました。当時は私も40歳という若さで、元気もよく、疲れも感じずによくがんばれた時期であったと思います。その後香川医科大学の卒業生が輩出されるようになってからは新入医局員も増え、一時期には25名を超える医局員数になり、活発に教育・研究・診療が行われていました。

平成10年4月から放射線医学講座の教授に就任しましたが、私の講座運営の方針としては対外的には関連病院に常勤医を派遣して充実するという方針を採りました。その結果、県内外の多くの施設や病院に常勤の放射線科医を派遣し、それぞれの施設や病院の診療に貢献できたと思います。

教授として在任した10年間にはいくつかの思い出に残るできごとがありました。その一つは平成15年10月の香川大学との統合で、もう一つは平成16年の独立行政法人化です。これによって医学部に何かメリットが

あったかと考えますと何もメリットはなかった感じで、例えば医学部の人事異動の遅延などでデメリットが多いような気もしていますし、附属病院の運営に関しても、診療収入を上げるため診療のみが重要視されるような状況になってきている感じもします。さらにもう一つの大きな出来事は卒後臨床研修の必須化です。この影響だけではないかもしれませんが過去5年間での放射線科入局者は1名のみという有様で、さらに大学から自分で探した他の施設へ移動した医師もいたため、放射線科では医局員の減少が顕著で、診療のみにすら支障をきたすような状況になっています。医局員の減少には私の責任も重いと感じています。

さて、私の後任についてですが、幸いなことに本学出身者で、同窓会会員の西山佳宏氏が教授会で選出され、5月1日付で放射線医学講座教授に就任しています。香川大学医学部教授に本学出身者が就任するのは薬理学講座教授、第三内科学講座教授に次いで3人目で、来年1月には法医学講座教授にも本学卒業生が就任することが決定しています。同窓会にとっては非常におめでたい出来事と考えています。医学部内での発言力も増え、教授会の決定にも大きなキャスティング・ボートを握って参加できるようになってきたと考えられます。これらの新任の教授と同窓会会員が協力して医学部の発展に貢献されるよう期待しています。

## 医学部における

### 歯科口腔外科

元歯科口腔外科学教授

長畠駿一郎



歯科口腔外科は医学部附属病院開院の昭和58年4月に診療科として設置されました。私は歯科口腔外科の初代教授として赴任し、このたび、3月末をもって定年退職いたしました。この間、大過なく過ごせましたこと大学関係者各位のご理解の賜と厚くお礼申し上げます。着任当初は診療、研究設備もなく、机上での診療室の設計、機器の整備計画、診療録の作成など、準備期間でした。同年10月の開院時には教授、助教授、助手、医員各1名、計4名のスタッフで診療を開始しましたが、外来診療では、看護婦さんが日替わりのため、器具の管理などに大変苦勞したことが思い出されます。その後、研究設備の年次的充実、歯科技工士、歯科衛生士、歯科医師の増員があり、次第に研究・診療体制を整え、平成元年には講座に昇格し、現在に至っております。

医学部において国家試験科目にない歯科口腔外科の

授業がなぜ必要なのかという疑問を持つ学生も少なからずいたと思います。しかしながら、歯、あご、口腔は身体の一器官であり、咀嚼を始め健康を保つための重要な役目を担っています。菌性感染症、口腔粘膜と皮膚疾患の関連、全身疾患と口腔の関係、移植医療や高齢者・障害者の口腔ケアの問題など、医師にとっても理解しておくことが必要と思います。

数年前、診療科名を歯科口腔外科から歯・顎・口腔外科に変更しましたが、従来の歯科口腔外科の診療内容は歯科と口腔外科なのか、歯に関連する口腔外科なのか疑問を持つ方々が少なからずありました。そこで、歯と顎骨と口腔の異常や疾患の診断と治療を行うという意味で歯・顎・口腔外科としました。病診連携については香川県の歯科医師会、開業歯科、病院歯科（口腔外科）、医科との関係を密にし、最近、増加している高齢者・有病者・障がい者の歯科治療や口腔外科治療、口腔心身症、顎関節の異常、インプラントを含む高度な歯科医療などに貢献することを願っています。

香川医科大学は昭和53年10月に開学し、準備期間を経て昭和55年から学生が入学しました。しかし、その数年後には医師過剰ということで、教職員、入学定員数の削減があり、5～6年前から医師の不足が叫ばれるようになりました。これに拍車をかけたのが言うまでもなく平成16年度から始まった卒後臨床研修の必修化です。功罪ありますが、研修病院として大都市の有名病院へ集中する傾向が顕著となり、地方における医師不足、また小児科、産婦人科、麻酔科など特定の科の極端な医師の不足が起り、厚労省は今年になりやっと地方における入学定員増の検討を始めました。今日、高度な医療、十分なインフォームドコンセントに基づく丁寧な医療の提供、急速な高齢者の増加などにより医療の需要はさらに増大すると考えられます。本学では、卒後研修センターの努力もあって最近2年間は地方では異例ともいえる研修医を確保できていますが、安心はできません。高齢者医療費の問題も含め、小手先の細工でなく、各関連機関による発想の転換、抜本的改革が必要と思います。

本学医学部医学科の卒業生も今年で23回目となり、約2,000名の同窓生が香川県を中心として、中四国のみならず全国でご活躍のことと存じます。

香川大学との統合、国立大学の法人化に伴い、病院経営の改善など多くの問題が山積していますが、新しく始まる附属病院再開発による医療の充実をめざし、香川大学および同窓会がますます発展するとともに、会員諸氏の健康とご活躍を祈念し、退任のご挨拶とさせていただきます。



## 就任挨拶

### 学部長就任挨拶

香川大学医学部長 阪本 晴彦



香川医科大学、香川大学医学部同窓会（讃樹會）の諸先生方には益々御清祥のこととお喜び申し上げます。さて、私こと、この度香川大学医学部長に就任いたしました。私は大学卒業以来、ずっと基礎の病理学で教育、研究と病理業務に力を入れてまいりましたが、大学の管理運営についてはどちらかというと無関心で過ごしてきました。このたび医学部長に選ばれ、大役を十分に全うできるかどうかはなほだ不安ですが、選ばれた以上は、全力で職務を全うしてゆきたいと決意しております。多くの方の御助力を得なければならないと思いますが、早く皆様のご期待に応えられるよう努力いたしたいと思っております。

旧香川医科大学は昭和55年に砂田初代学長の指揮のもと讃岐のこの地で生まれ、以来西田、入野、田中、田邊の5学長、香川大学医学部になってから岡部、田港の2医学部長のもと、諸先生方、教職員、卒業生の方々の御尽力、さらに香川県はもとより近隣諸県の関係各位の御支援により今日の医学部に成長することができました。この間、平成8年に看護学科が開設され、医学科と共に香川医科大学、香川大学医学部の歴史と伝統を築いてまいりました。今後さらに医学科、看護学科が一致協力し建学の理念を継承しながら、多くの医師、看護師を養成しつつ、医療に研究に成果を挙げてゆきたいと考えております。

香川大学との合併、法人化の後、大学が独自に高水準でかつ特色のある教育・研究を展開し、社会貢献していくことが求められ、それらの活動についての評価に応じて、予算措置が講じられるということになりました。まさしく、生き残りをかけた熾烈な競争が大学間で始まったといえます。大学として、また学部として、自分たちの力量を高め、方向性を明らかにし、個性を生かした大学作り、学部経営を行うことが必要です。さらに、一方では、多くの関連する学部間や大学間、さらには大学外のいろいろな団体と協力関係を結び、有機的な連携を図ることにより一つの大学や学部ではなしえないような事業をすることなども求められております。人的にも経済的にも困難な時代ですが、多くの英知を結集し、日々努力することで、難局を克服していかなければならないと考えております。

現在では従来の医学部としての教育・研究・診療の役割の他に、さらに地域貢献、社会貢献が重要な評価項目となって、これまで以上に中核的医療機関としての役割やそれ以上の貢献が求められるようになっております。医療・保健・福祉の教育、研究、研修の支援機関としての役割、その他地域社会に対する幅広い支援活動も問われております。石田附属病院長をはじめ多くの病院職員も、より活力に富んだ病院を建設するために心血を注いでいます。昨年度のマッチング100%達成などもあり、若い力が学内に充ち満ちてきています。

私が香川医科大学に転勤してきて以来、早20年が経とうとしております。当時学生であった人々も今は立派な医師に成長し、母校の教授も誕生しております。当たり前のことかもしれませんが、大学をよりよくするには卒業生が大学の内外で活躍し、診療はもとより、研究、教育に活躍することにより、さらにいい学生が集まるようなpositiveな連鎖をつくることです。それには、日常の地道な努力がかかせません。

さらに新たな展開を繰り広げ、発展するためには、讃樹會の皆様のご理解とご支援がより一層大切になってくることは申すまでもなく、讃樹會との協力関係を益々密にしてゆく必要があるかと思っております。今後、益々のご指導、ご鞭撻を賜りますよう、なにとぞ宜しくお願い申しあげ、ご挨拶とさせていただきます。

### 香川大学医学部附属病院 病院長就任挨拶

—讃岐の丘から世界に発信できる  
教育・研究病院を目指して—

香川大学医学部附属病院病院長

石田 俊彦



香川大学医学部医学科同窓会讃樹會の皆様には、日頃から医学部附属病院に対して格別のご理解とご支援をいただき感謝いたしております。

私は、旧香川医科大学附属病院が昭和58年10月に開院する半年前の4月から、附属病院でお世話になっており、最近の5年間ほどは教育・研究担当の副病院長、卒後臨床研修センター長、香川大学医師会長として、前病院長の長尾先生のもとで仕事をさせていただき、多くのことを学ばせていただきました。この度、長尾病院長の後任として平成20年4月1日付けで、香川大学医学部附属病院長に任命されましたので、一言ご挨拶と抱負を述べさせていただきます。

病院の基本理念を尊重した上で、地域医療の向上を目指した本院の再開発の基本理念である「患者さまを癒し、患者さまに信頼される、地域社会の中核となる高品質の診療・教育・研究の場を目指す」を掲げて、病院運営と再開発に取り組む覚悟です。病院再開発のコンセプトは、「地域密着型病院」「医療安全推進病院」「機能集約型医療体制の構築」「先進医療を目指す専門医の教育・研修病院」の4つだと思います。特に、教育・研究に特化した病院としてシミュレーション・スキルセンター構想を掲げて、中国四国一の教育・研修病院をめざしていきます。病院再開発を通じまして隔々までこの基本理念を徹底させ、県民ならびに地域医療機関の要望に答えるべき病院を目指してまいります。皆様から信頼される臨床医を育成することも、大学病院に重要な使命です。幸いにも、本院では卒後臨床研修医の定員フルマッチという快挙を成し遂げました。これは、病院の教職員と医学部教職員の団結と、同窓会の皆様、関連病院の先生方のご理解とご協力の結果で、厚くお礼申し上げます。今後もこの勢いを継続させていくように努力いたします覚悟です。

平成19年度に実施しました事業のいくつかを紹介します。平成19年4月に腫瘍センターと内視鏡診療部、平成20年2月に高次脳機能障害外来診療部を、平成20年4月には遺伝子診療部を設置しました。がん診療連携拠点病院とエイズ診療中核拠点病院にも指定されています。このように、多くの特殊診療部が設置されましたが、より安全で安心でき、より質の高い医療を提供しなければなりません。

そのためには、先ず医療技術の改善と向上を目標とした医療機器やシステムの整備・導入であり、二つ目

は安全な医療が施せるような就労環境の改善と機器の更新です。平成20年度の施設・設備関係では、①CR情報画像フィルムレスシステムの導入、②眼科画像診断システムの導入、③採血・免疫検査システムの導入、④眼科電子カルテシステムの導入、⑤化学療法のオーダーシステムの導入を予定しています。

就労環境の改善策として、コメディカル非常勤職員と、専門医資格を有する非常勤医師（医員）の常勤化を平成20年4月より行い、優秀な職員の定着による、安全で信頼できる診療体制の確立に向けて努力しています。さらに、病棟クラークの配置、看護助手の採用などで、コメディカルと診療医師の労働環境を改善して、安全で安心できる先進医療を提供できる病院を目指します。また、念願であった院内保育所が平成20年4月に開設され、現在は入所待ちの状況です。

讃岐の丘から世界に発信し世界に誇るものとして香川遠隔医療ネットワーク（K-MIX）があります。このシステムを利用することで、医療行政、臨床研究、大規模調査研究など無限の可能性が考えられます。今年度の計画として、糖尿病クリティカルパスの作成にあたりK-MIXを利用した電子パスを作成し、関係医療機関に配布する予定です。国の政策である電子健康手帳を目標にして、大学附属病院と大学医師会との協力により、母子手帳の内容から始めて、一生使用できる生涯健康電子手帳の作成を中期目標としてまいりたいと思います。

「讃岐の丘から、世界に発信」を目標として、地域に生かされ、世界に羽ばたく附属病院を目指して、職員一同、力を合わせてこの難局を乗り越えてまいりますので、同窓会の皆様方のご理解とご支援、ご協力をお願い申し上げます。

# 医学部新学部長・副学部長を迎えて



日時：平成20年5月20日（火）  
19:30～21:30  
会場：菊水

医学部長  
阪本晴彦先生  
副学部長  
森 望 先生  
評価・広報・社会連携担当  
上田夏生先生  
医学科教育担当  
千田彰一先生  
大学院教育及び研究担当  
中村隆範先生  
入学試験担当  
讃樹會  
会長 高橋則尋  
名誉会長 濱本龍七郎

**濱本** 本日はお忙しいところ、学部長と副学部長においでいただきありがとうございます。会長から一言お願いします。

**高橋** 4月に同窓会総会がありまして会長職6期目となりました。今回、学部の体制が一新され、同窓会として大学の運営に少しでもご協力させていただきたいということもありまして、本日こういう場を設けさせていただきました。

**濱本** 新学部長から一言お願いします。

**阪本** 今日はありがとうございます。大学がどんどん伸びていくためには今の学生さん、卒業生が何とかして残り、頑張っって研修して、しかもそれを楽しんでやってもらえるような環境が作れたらと思います。またそれは同窓会の方と一緒にできる仕事かと思うので、よろしくをお願いします。

**濱本** 森先生に副学部長を代表して一言お願いします。

**森** 同窓会の方々の協力もあって研修医が100%残り、全国の地方大学から非常に注目されています。まずはその理由を把握することで今後も続けていけるかと思えますし、同窓会にも支援していただけたらと思います。今後の香川大学医学部と讃樹會の発展を祈念致します。ところで、マッチングが100%を維持している理由は何でしょうか。

**高橋** 長尾元病院長、石田現病院長のご指導と、卒後臨床

研修センターや指導医の先生方のご努力の賜物と思います。そして、大学が専属の講師を置いていただいたことも非常に良かったです。我々同窓会も3年くらい前から、学生や研修医にアンケートをとったり、医学部祭の時に学生と懇談会を持ったりして、地道に若い人たちのニーズを掘り起こすことに努めてきました。皆が一丸となった結果、同窓生をはじめ現場のスタッフが誇りをもって働いているというのが今、効いているのではないかと思います。

**上田** 今の若い人は、学部教育でも卒業してからも一人一人のニーズを尊重しないとだめです。昔の医学部のように組織のために犠牲になれという考えは通用しないです。

うちのマッチングは数が多いだけでなく優秀な人が残ってくれており非常にいい傾向ですね。

**濱本** マッチングで9人から40人に増えるということは並大抵の努力ではないと思います。

**千田** それぞれ学年毎の違いもあります。そして、病院長、卒後臨床研修センターはいろんな手を打ち出していますし、やはり松原先生の存在は大きい。また、教官のモチベーションも変わりました。

**濱本** 話は変わりますが、それぞれの副学部長の役割をご説明いただけますでしょうか。

**千田** 大学院教育及び研究担当です。大学院・研究で問題となっているのは、一つは科研費等外部研究資金取得、もうひとつは研究員数の確保ですね。特に科研費獲得の落ち込みを分析していく必要があります。

**上田** 全国の地方医学部に共通する現象としては、卒後臨床研修制度以降の入局者が減っていて、うちも落ち込みが大きい。もうひとつは、香川医科大学の時に比べて、統合によって外国人留学生の国費、奨学金が取りにくくなった。国費の割り当ても、ちょっと厳しくなっているのではないかと思います。



阪本医学部長

**中村** 入学試験担当です。ある程度の倍率を確保しながら、優秀な学生さんに入ってもらって質を確保するというのと、滞りなく入試を務めあげること。後は、来年度から県民医療推進枠ということで5名の定員増が9年間に亘ってありますので利用してもらいたいと思います。県出身者に限らず、「県の医療に尽くしてくれる人」の確保を目指した、全国からの入学者枠です。

**上田** 医学科教育担当です。学部教育と学生生活のお世話をする学務委員会の委員長をしています。これまでも2年間やってきましたが、いろんなことが次から次に起こる大変なところ。留年や懲戒処分に関わるなど、どちらかというと学生の嫌われ者です。公平ということが大学のために必要だろうと思っています。そしてやはり、学力の維持が大事。真面目に勉強する習慣がある人が多分、卒業後大学に残ってくれるだろうという期待もあります。その一方で、西医体の成績も結構気にしています。このところ、ちょっと低調なんです。1年生の時はキャンパスが分かれていてなかなか練習しにくい。また、医学部キャンパスのスポーツ施設が老朽化してきており修理が必要ですが、簡単にはいかないです。

**濱本** ところで、学務に関連して最近の教養科目についてお聞かせいただけませんか。

**上田** 教養教育は、教養を身に付けるものと、医学の専門教育のための準備教育の二つに分かれています。準備科目で必修になっているものについては出来るだけ今後とも医学部が責任を持っていきたいです。数学、生物、物理、化学などがそうで、少なくとも医学部が求めるレベルの授業が必要です。それに対して、文学、倫理学、哲学、芸術等はいわゆる教養であり、多様性があり選択肢が多いほど良いわけです。そこは旧香川大学の先生にお願いしています。

**千田** それ統合の最大のメリットでしょうかね。



**高橋** 同窓生の中に最近卒業後教育に関わる者も結構多く、今行われている卒前教育の内容に興味を持っています。僕も、今日初めてお伺いして、昔とは大分変わってることがわかりました。

**上田** 同窓会の先生方にもよく知ってほしいのですが、最近すごくいろんなことが変わっています。昔は教授とか上



の方の人だけが教育をやっていたらいいということだったかもしれませんが、今は、チュートリアルにしてもCBTもOSCEもマンパワーがいるんです。多くの教員が少人数教育に少しずつ関わるようになっていきます。診療で忙しいでしょうが、助教クラスの先生も一緒になって頑張りたいと思います。その層は圧倒的に卒業生が多いですから。

**高橋** 卒業生もぼちぼち年代が上がってきていますが、余裕が出てきている人は、外に出ても対外的に協力ができるならやってみたいという人が結構います。

**上田** 今、非常勤講師の枠が大幅に広がり、チュートリアルやポリクリを手伝えるようになりましたから、卒業生で大学を離れているけれども大学に週に一回でも来れるような先生はどんどんそういう形で参加していただければありがたいです。今は非常にマンパワーが必要な教育体制になってきています。

**千田** 昔の助手ってというのは、本来は授業担当教官ではなく自分で授業を講義する資格を持ってなかった。授業は講師以上でね。今、助教と名前が変わり、助教も授業担当教官に認定された、そこが既に変更されています。しかし、未だに教官の意識を持っていない人がいるのも事実です。それから、診療所で開業されている先生にも臨床講師の形をお願いしています。卒後臨床研修センターが、臨床研修の指導医養成講習会を毎年やっていて、今年は8月30日、31日の予定ですが、是非受けて指導医の資格を取ってほしいです。基幹病院であっても、指導医の資格を持たない人がいて、そこへ研修医で出せない場合があります。

**濱本** 教育担当は大変ですね。

**上田** 大変ですが、今回千田先生が臨床の方をかなりやってくさるので助かっています。

**濱本** 次は森先生の役割をお願いします。

**森** 評価、広報、社会連携担当です。評価は、卒後臨床評価とか中期目標の複雑な評価などですが、それが大変です。

**濱本** 教官を評価するんですか？

**阪本** 両方です。教官個人個人を評価するというのもあるし、学部においていろんなことに取り組んだかとかいうことを評価します。

**千田** 必ず評価がついてきます。研究や診療はもちろん、教育も評価の対象で、そればかりやらされていると感ずることがあるくらいです。しかし、そのためのスタッフが全然増えないで、それでなくても精一杯の時間の上に、同じ人員であれやこれやの評価をやらうとするのだから大変です。

**濱本** それでは、広報についてお聞かせください。

**森** 広報は、特にHPの運営をしていて、もうじき新しくなる予定です。最近の若い人は結構見ているんですよ。

**濱本** それでは、医学部として同窓会組織に望まれることは何でしょうか。われわれも先ほど高橋先生が言ったように両輪としてやっていきたいと思っていますので、ご意見をいただけますでしょうか。

**阪本** 精神的なものがあるでしょうか。大学に残ったらそれだけ医者としてやっていける、その方がいいよ、というような。この大学を出て良かったな、ずっといていたいなあとという気持ちにさせてもらえるようなところがあれば嬉しいなと思います。



**上田** 大学は去年から白衣授与式を始めたのですが、学生はそれを着てポリクリを受けて結構好評です。それに加えて、今年からは職員に準ずるような形の写真入名札を作りました。同窓会が学生にアピールするためには、入学時や、5年生に上がった時に全学生に対して何かするというのが、効果があると思います。賞や助成金は、もらった人はそれはそれで非常にありがたいけれど、大多数の人は全然ありがたいとか嬉しいとか思わないし、同窓会に感謝したりしない。同窓会が全員に親しみを持ってもらおうと思ったら、全学生に平等にどんなことができるかを考えてほしいと思います。

**濱本** ちょっと考え直さないといけないかもしれませんね。

**上田** もうひとつお願いですけど、統合してから入学時に行事が増えたので、今年は、土曜日に新歓行事をする代わりに、日曜日は完全にフリーにして何もしないことに決めただけですが、その後で、新生に日曜日の同窓会行事への参加の誘いがあった。同窓会も学務室も、学生にとっては

同じ大学のものなので、前もって打ち合わせて例えば土曜日のうちに一緒にするとか出来なかったのでしょうか。今後、学生に働きかける時には、学務室を通してやってもらえば、学務室の方で広報もしてもらえます。



**中村** 2学生に上がってきた時に講義のガイダンスをやるので、ああいう時の方がいいんじゃないですか？普通の日になるけど。

**上田** どういうタイミングで同窓会を紹介するかというと、入学時に、新歓行事の一環で、同窓会が自由に使える時間をとることも出来ます。同窓会の人が入学式の直後に働きかける機会っていうのは、あって然るべきだと思いますので。同窓会の会長が挨拶して同窓会の説明をするような時間はとれると思いますよ。

**中村** 総会は日曜だったと思いますが、今年はOBの教授になった先生お二人が講演されたわけでしょう？もったいないですよ。ウィークデーにやってもいいんじゃないですか？むしろ、大学の学生がちょっと覗いていこうかなっていう時間帯でもいいのかなと思います。

**濱本** ざっくばらんにいろいろ言っていて、それを参考にして、いろいろ考えたいと思います。

**千田** 卒業生で県外に在住していて、香川にもう一度戻ってきたいと思っている人に対して、是非県内へUターン勸奨、そういうアナウンスをしてほしいですね。今、全国どこも医者不足ですが、香川大学にとっては香川県の病院へ卒業生を送り込む絶好のチャンスなんです。ですから、いいところがあるんだったら香川に帰ろうかなと思っている人の希望を聞くことができる窓口になってもらいたいと思います。できたら同窓会の中でそういうことをやる人を作ってもらって、メールや、会報などで他県で活動している人に情報を発信してほしいと思います。一時期でもいいから香川に戻ってもいいと思っている人がきついているのです。しかし、その情報が我々に伝わってこないのです。同窓会が大学にそういうことを知らせてほしいと思います。

**濱本** 大学への窓口はどこでしょうか？

**千田** 病院長になっており、医学部附属病院に委員会を作っています。

**高橋** 従来は医局単位で行っていたことですね。

**千田** もはや医師人事はそんなことでは対応できないのです。

**高橋** 同窓会会長ということで、個人的には結構、問合せがあるんですが。

**千田** 先生が会長としてそういった情報を止めるのではなくて、ある意味でもっとシステムティックにしていればと思います。こういう機会だからあえて言うのですが。

**阪本** 医師が不足している原因の一つとして、日替わりでいろんなところに勤務する、それを足し算すると、月給よりも何倍も給料が入る、そういうことで生計を立てている人が結構います。最近は何の職種に限らずそういう傾向があります。

**上田** 大学の教育が仮に非常勤講師ばかりで成り立っていたら、大学でまともに学生の面倒を見る人がいなくなりますね。大学の管理や運営をする人がいなくなってしまう。

卒後臨床研修センターで、最近6・5年生に卒後臨床研修の説明会をされていましたね。大きなポスターがありましたけども。

**千田** 98人集まったので、学生の関心が高いと思います。少なくとも今では本学部附属病院研修医定員枠に入れないかも知れないという人も出てきたわけだから、かなり増えてきています。

**高橋** 他大学の例を見ても、いったん出てしまうと帰ってこないの、まずは初期臨床研修で残さないと、後期が残せないということがありますね。

**上田** それもあるでしょうが、外で研修をして、今年の4月から大学に戻ってきた人がいるのを見ますと、卒後臨床研修でたくさん残るようになると、一度外に出て2年間過ぎた人をまた戻す吸引力もあるのかなあと感じます。

**阪本** 3年目に戻ってくるかどうか勝負ですね。

**上田** 学生は、大学が自分たちを大事にしてくれているかどうかにか結構敏感で、カリキュラムや留年の問題など単に制度というだけでなく、気持ちの問題がそこに入ります。カリキュラム上もあまり無理がないかどうかということも気をつけないといけないし、大学側と学生との間の信頼関係を作ることが肝心ですし、サークル活動も大事です。

**高橋** ある時期には香川医大が専門学校化していて、医師免許のライセンスをとるだけの場所で、取ったらさよならってというのが非常に多かったのですが、最近はそれを聞きません。母校愛が強くなったのでしょうか。

**上田** 対外的にもね、国試やその他のことで、いい成績をとってきたらやっぱり大学に対する自信が出てくるでしょう。自分がどこ卒業だということを堂々と語れるような何かを持つことが大切です。勿論、我々は研究者だから立派な研究をして、大学の名前を高めるということも大事なことです、学



中村副学部長

生が求めているのはもう少し違うところにあるというの、この仕事をやるようになってわかってきました。やはりきっちり指導してほしいのです。ポリクリに行った学生は臨床の先生が忙しいのはよくわかっているのですが、随分、面倒を見てほしがってますね。

**濱本** やはり学生にとっては面倒をみってくれる先生がいい先生ですね。

**森** それとね、開講してかなり経ってきた重みが出てきました。一期生はまた違うけれど、10年目くらいが一番低く、20年目くらいからだんだん歴史というのが出来てきてね。これから更に10年、20年経ってくるとかなり違ってくるので、そういう意味でさよならをいう人が減ってくるでしょうね。

**濱本** 母校出身の教授(薬理学 西山成先生、消化器・神経内科 正木勉先生、放射線科西山佳宏先生)が誕生され、上昇気運を感じます。

**上田** 学生さんを見ていたらそう思います。どんどん優秀な学生さんが入ってきてくれているから心強いです。

**濱本** 学部長、副学部長からいろいろなお話を聞くことができ、同窓会にとって有意義な時間でありました。今後は各々の先生方とお会いして、各論を聞かせていただきたいと思います。本日はありがとうございました。



## 第10回定期総会開催報告

開催日時 平成20年4月6日（日）  
開催場所 香川大学医学部臨床講義棟 1F

15:00 ~ 16:00 総会  
16:00 ~ 16:10 同窓生教授就任記念品贈呈式  
16:10 ~ 17:10 記念講演1 菅原康志先生  
17:10 ~ 18:10 記念講演2 清水 徹先生  
19:00 懇親会（さざなみ亭）

### 自由な発想と「オモロー！」

第10回の定期総会の特別講演にはお二人の同窓生を講師としてお迎えしました。一人は自治医科大学形成外科学講座教授 菅原康志先生、そしてもう一人は金沢大学細菌感染症制御学教授 清水 徹先生。全く異なる領域でご活躍のお二人ですが、実はある共通点があります。皆さん分かりますか？ お二人とも軽音楽



講師の菅原康志先生「Think different」

部出身なのです。しかも初代と2代目の部長！。というわけで、元軽音楽部の私（ちなみに6代目の部長でした）としましては、大変楽しみにしていた講演でありました。菅原先生からのtake home messageは“think different”で、型にとらわれない自由な発想が新しい発見を生むということでした。また、清水先生



講師の清水徹先生「細菌はなぜ病気を起こすのか？  
～香川を離れて17年～」



からは、世界のナベアツ風と言えば「オモロー」を追求するこだわりが大事であるとのメッセージを受け取りました。お二人とも、専門領域の話題はもちろんのこと、合間に学生時代の思い出話や逸話？あるいは卒業後の医師あるいは医学者としての様々な経験など、普段の学会や研究会では聞くことができない、ここでしか聞けない貴重な話を聞くことができ、非常に有意義でした。ちなみに菅原先生は私の大学入学した年に卒業されたので、伝説の「初代部長」にお会いしたのはこの時が始めてでしたが、同期の皆さん曰く「殆ど変わってない」とのことでした、音楽はされてないのですかとの質問に、やり始めるとのめり込むので最近では遠ざかっているとのことでした。清水先生は卒業後しばらく大学の微生物学講座で在籍しておられたので、私も定期演奏会の時などお世話になっていました。現在も金沢大学で、軽音楽部の顧



問をされているとのことでした。また、最近ではクラシックピアノも始められたそうです。講演終了後の懇親会の席では、同期の先生方を中心に昔話に花が咲き、短い時間でしたが、同期会さながらに楽しくすごしました。お仕事の都合で、清水先生は途中退席されましたが、帰り際、名残惜しそうに「帰りたくないよー」（例のトーンで（笑））とおっしゃったほど盛り上がりました。菅原先生、清水先生、ありがとうございました。

（7期生 乾 政志）

## 第10回総会議事録

1. **開会宣言** 出席者と委任状を合わせて508名の参加となり、正会員の10分の1以上を満たし総会が成立した。
2. **議長選出** 満場一致で副会長の関啓輔先生（昭和62年卒）が議長に選出された。
3. **教授就任祝賀の報告** 平成18年4月から現在までの、同窓生の教授就任報告がされた。

4. **平成18・19年度事業報告** 各局長から事業報告がされた。▶**学術局** ①



司会の関副会長と監査報告する出口監査委員長



田井選挙管理委員長

研究助成金事業②国外留学助成事業  
▶**事業局** ①医師賠償保険取り扱い事業②後援協賛事業③支部・同期会助成  
▶**教育研究支援局** ①研修医支援②学生援助 ▶**広報局** 会報発刊

5. **平成19年度決算報告および監査報告**

平成18年度以降は、単年度決算実施。18年度決算は理事会で承認済みであるため、本総会では、乾事業局長から19年度決算報告が行われ、引き続き出口監査委員長の監査報告の後、参加者の承認を得た。

6. **会長選挙** 立候補が高橋則尋現会長（昭和61年卒）のみであるため、

信任投票を実施した。総会開催宣言までに届いた郵便投票に、総会出席者の

投票を加え、田井選挙管理委員長の監督のもと、開票作業が行われた。投票

総数482票の内、信任票478票、白票4票で高橋則尋会長の次期会長再任が決定した。

7. **会長所信表明** 会長に再任された高橋則尋会長による所信表明が行われた。

8. **副会長任命** 新しい執行部の副会長に、平川栄一郎先生、関啓輔先生を会長が任命し、出席者の承認を得た。

9. **20年度予算案承認の件**

乾事業局長より予算案の説明があり、承認を得た。（19ページ20年度予算参照）

10. **名誉会員推薦の承認の件** 退官を機に特別会員の先生が名誉会員として推薦され、承認された。長尾省吾先生（香川大学医学部附属病院病院長）、波多江種宣先生（組織細胞生物学）、立川敏明先生（基礎放射線学）、井尻巖先生（法医学）、大川元臣先生（放射線医学）、長島駿一郎先生（歯科口腔外科学）

11. **閉会宣言**

### 同窓生教授就任記念品贈呈式

香川大学医学部の教授に就任された消化器・神経内科正木勉先生と放射線科西山佳宏先生に、総会開催に併せて、讚樹會から記念品の時計の贈呈式がありました。



謝辞を述べる正木先生(左)と、西山先生(右)



開票作業

投票を加え、田井選挙管理委員長の監督のもと、開票作業が行われた。投票





# 平成19年度会計報告及び平成20年度予算

## 平成19年度収支報告書

平成19年4月1日から平成20年3月31日

### 事業活動収支の部

単位：円

科目	予算	決算
1.事業活動収入		
①前期繰越収支差額	18,653,242	18,653,242
②会費・入金収入	6,250,000	10,791,000
③寄付金・広告収入	1,500,000	1,430,000
④雑収入		77,264
事業活動収入計	26,403,242	30,951,506
2.事業活動支出		
①事業費支出		
会報制作費	500,000	499,600
会員名簿編纂費	100,000	0
後援協賛事業費	500,000	461,804
支部・同期会費	750,000	215,200
学術助成金事業費	2,500,000	2,002,870
学生援助基金	1,000,000	572,845
研修医協力費	500,000	434,422
法人化調査費	200,000	0
事業費支出小計	6,050,000	4,186,741
②管理費支出		
事務人件費	2,000,000	2,075,747
事務局・各委員会運営費	1,000,000	791,867
事務局設備投資費	300,000	0
通信費	750,000	637,726
慶弔費	200,000	132,114
雑費	50,000	97,777
香川大学同窓会連合会費	0	100,000
予備費	1,000,000	0
管理費支出小計	5,300,000	3,835,231
事業活動支出計	11,350,000	8,021,972
事業活動収支差額	15,053,242	22,929,534

## 貸借対照表

平成20年3月31日現在

単位：円

資産の部	金額	負債及び 正味財産の部	金額
資産		負債	
1. 流動資産	(26,120,934)	1. 流動負債	(3,191,400)
現金・預金	22,929,534	保険料預かり金	3,191,400
保険料預かり預金	3,191,400		
2. 固定資産	(16,064,873)	2. 固定負債	(16,000,000)
同窓会館建設引当預金	16,000,000	同窓会館建設引当金	16,000,000
備品	64,873	正味財産	22,994,407
合計	42,185,807	合計	42,185,807

### 重要な会計方針

・固定資産の減価償却方法

備品・・・定額法により実施している

## 財産目録

平成20年3月31日

単位：円

資産の部		
1. 流動資産		
(1) 現金・預金		
イ) 手許現金		72,041
ロ) 普通預金	百十四銀行三木支店	1,209,746
	香川銀行本店	100
ハ) 郵便貯金	郵便振替貯金事務センター	10,533,725
ニ) 定期預金	香川銀行本店営業部	10,093,180
	百十四銀行医大前出張所	1,020,742
(2) 保険料預かり預金		3,191,400
流動資産合計		26,120,934
2. 固定資産		
(1) 特定目的資産	同窓会館建設引当預金	16,000,000
(2) 有形固定資産		
備品	コピー機	13,500
	パソコン	51,373
固定資産合計		16,064,873
資産合計		42,185,807

## 固定資産の内訳 (平成20年3月31日現在)

資産の名称	数量	取得年月	取得価額	償却方法	耐用年数	償却率	当期償却額	未償却残高
デルPC	1	11.04	219,870	定額	4	0.25		10,993
キャノンコピー	1	12.06	270,000	定額	5	0.2		13,500
富士通パソコン	2	14.03	529,600	定額	4	0.25		26,480
パソコン周辺機器	1	14.03	278,000	定額	4	0.25		13,900
			1,297,470				-	64,873

## 監査報告書

平成20年4月2日

香川大学医学部医学科同窓会  
会長 高橋則尋 殿

公認会計士

岩村浩二

私は、香川大学医学部医学科同窓会監査委員会の平成19年4月1日から平成20年3月31日に至る平成19年度決算報告書の監査を実施した結果、適正妥当に表示されているものと認めます。

以上

## 監査報告書

平成20年4月3日

香川大学医学部医学科同窓会  
監査委員会 会長 高橋則尋 殿

監査委員長 出ロー

監査委員会監査委員会は、平成19年4月1日から平成20年3月31日に至る平成19年度決算報告書の監査を実施した結果、適正妥当に表示されているものと認めます。

以上

平成20年度収支予算

平成20年4月1日から平成21年3月31日まで

事業活動収支の部

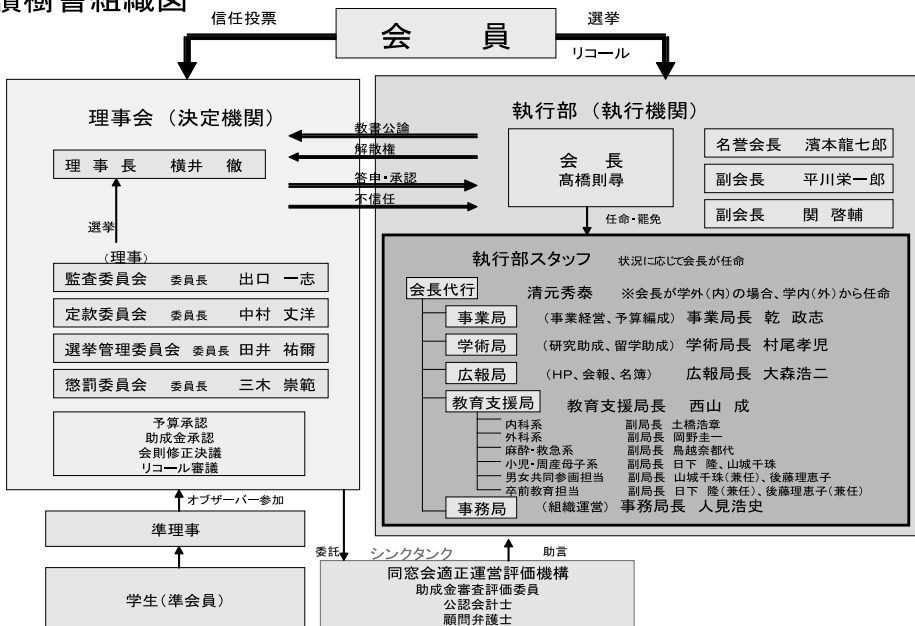
単位：円

科目	予算額
1. 事業活動収入	
①前期繰越収支差額	22,929,534
②会費・入会金収入	5,000,000
③寄付金・広告収入	1,500,000
④委託手数料収入	165,000
⑤雑収入	
事業活動収入計	29,594,534
2. 事業活動支出	
①事業費支出	
会報制作費	550,000
会員名簿編纂費	0
後援協賛事業費	500,000
支部・同期会費	500,000
学術助成金事業費	2,600,000
学生援助基金	1,000,000
研修医協力費	500,000
法人化調査費	200,000
事業費支出小計	5,850,000
②管理費支出	
事務人件費	2,000,000
事務局・各委員会運営費	1,000,000
事務局設備投資費	300,000
通信費	750,000
慶弔費	500,000
雑費	50,000
香川大学同窓会連合会費	100,000
予備費	1,000,000
管理費支出小計	5,700,000
事業活動支出計	11,550,000
事業活動収支差額	18,044,534

20・21年度理事一覧

卒年	氏名
S 61	大西 宏明
	出口 一志
S 62	泉 佳成
	合田 文則
S 63	西田 智子
	横井 徹
H 元	佐藤 清人
	塚口 眞砂
H 2	有馬 信男
	星川 広史
H 3	羽場 礼次
	出石 邦彦
H 4	中條 浩介
	三木 崇範
H 5	田井 祐爾
	河田 興
H 6	金西 賢治
	川西 正彦
H 7	浅賀 健彦
	加地 良雄
H 8	串田 吉生
	中村 丈洋
H 9	星川 洋一
	出口 章広
H 10	村田 晶子
	岩田 憲
H 11	山下 史朗
	古泉 真理
H 12	森 美津子
	鎌田 英紀
H 13	横平 政直
	原 大雅
H 14	森脇久美子
	中野 淳
H 15	常森 寛行
	上北 郁男
H 16	谷 丈二
	石原 靖大
H 17	門田 球一
	小谷野耕祐
H 18	中村 信嗣
	北村 悠樹
H 19	新居 和人
	石原さやか
院修了	須藤 広誠
	植村麻希子
	豊田 康則
	三宅 実
	小川 尊明

讚樹會組織図



## 理事会議事録

平成20年度第1回

開催：5月12日（月）20:00～21:00

### 1. 理事長選出

立候補がなく、横井徹前理事長が留任することが承認された。

### 2. 常任委員会委員長選出

候補がなく、前年度の委員長が今年度も継続して理事となっている場合は留任していただき、欠員の場合は新たに決めるという方針で、本人の意向を伺うこととなる。

定款委員会委員長は、中村丈洋先生が承諾。

懲罰委員会委員長は、三木崇範先生が承諾。

監査委員会は前年度委員長出口一志先生に、また、選挙管理委員会は前年度委員長田井祐爾先生に後日、留任の意思を伺うが、どうしても固辞された場合は、新しい委員会メンバーが揃った時点で責任を持って委員長を決めることになった。

次に所属委員会の決定について話し合わせ、理事は全員何らかの委員会に所属する必要がある、前年度からの継続理事は、前年度の委員会に所属するという事で承認を得た。当日の参加者の新規理事に希望を伺う。

当日の欠席者には、理事会メーリングリストで希望を伺い、調整することになる。

### 3. 国外留学助成金の審査・決定

平成20年度第1回国外留学助成金につき、学術局による1次審査を経た2件に対し、理事会で2次審査を行った。

滝 正徳（平成10年卒） ¥167,900円

松本謙介（平成12年卒） ¥225,000円

▶以下の議題から執行部が参加する

### 4. 会長教書演説及び執行部の承認・不信任

総会の会長選挙で信任された高橋則尋会長から教書演説があり、会長の任命による執行部人事案が理事会で承認された。（P19 組織図参照）

### 5. 20年度予算及び事業計画の審議・承認

総会で承認されている20年度予算及び事業計画について、予算通り事業計画を執行していくことが新理事会で承認され決定した。

#### 【執行部からの予算説明】

基本的には、昨年度予算とほぼ同等の規模にしている。

事務人件費を削減するという事で、事務員を一人にしているが、事業としては同じ事業を行っている。

事務局設備投資を昨年度は全然していなかったが、名簿管理しているパソコンの調子が悪くなってきているので、予備費あたりから、サーバーも含めて修繕する可能性もあるが、現状としては昨年並の予算としている。

研修医協力費。研修医がフルマッチを続け、更に質的な向上を得るように、本年度も同様な研修医協力費を上程させていただいている。

前回の理事会において、研修医指導医養成講習会への支援内容が飲食代が多いので固定した費用で支援したいという意見があり、本年度より指導医講習会の会場である、屋島研修センターの会場費用に切り替えていただくように、卒後臨床研修センターにお願いしている。ただし、そのため、支出が

2、3万高くなる可能性もあり予備費あたりから崩すかもわからない。

研修医懇談会は、在校生（5,6年生）を対象にした来年の卒後研修のマッチングに参加して下さいという説明会で、学生と研修医には軽食と飲み物を提供している。

学生援助基金は、今年はカルガリー大学への派遣はない予定だが、新たにチェンマイ大学と国際交流のための学生派遣があるかもしれないので、例年通りの予算としている。

学術助成金は例年通り。

▶法人化調査費は形だけなのかという質問あり。

#### 【答弁】

現状では法人化するメリットが無いが、事業を大きくするには法人格を取得しなければならない。将来的に可及的速やかに法人化手続きを始めなければならない際に、会計士や弁護士に相談するためには、予算があった方がいい。

### 6. 卒後臨床研修への支援策の審議・承認

前回理事会で研修医協力費の指導医講習会への支援内容を検討することが新年度理事会へ持ち越しとなり審議される。前回、指導医講習会への補助は問題はないが、食事に対する補助ではなく、プログラムを実行する上で必要なことに有効に利用してほしいという意見、要望があった。執行部から、予算の説明に伴い、指導医講習会については、食事代ではなく会場使用料などの経費を支援する形をとるように卒後臨床研修センターに申し入れていることが説明され、その方向での援助で進めることで承認された。

### 7. 同窓会選挙規定改正の審議・承認

#### 第7条 会長選挙の開票及び開票時の問題処理

1 「投票用紙の開封は、総会において公開して行う。」を「投票用紙の開封は、選挙管理委員会が、総会開催までに公開で行う。」と改定する。

#### 【執行部からの説明】

これまで、総会において、会長選挙の開封作業を総会参加者で行うことが通例となっているが、投票者は開票操作に不正がないかを見守るというのが普通の選挙であり、投票者が開票しに行くのはおかしい。また、総会の中で進行を止めて開封作業に時間をとられるため、総会後の記念講演会等の予定時間に支障も出る。

総会までに、選挙管理委員会が、参加者の前で開票作業を行い、決定した新会長が開催宣言をするのが妥当な選挙の流れである。

郵送分と、当日会場に持参分も併せて開票する。郵送をしなかった人は、当日、会場で総会開催宣言前に投票する。

郵送したことを忘れて、当日も投票する可能性については、記名投票なので、調べることができ重複は避けられる。

投票を郵送だけに限ると、住所変更等で投票用紙が届かないという場合もあるので、投票の公平性を保つためには当日投票は必要。

会報等で選挙の告示の際に、総会の前までに投票することとし、開票公開の日時、場所を明記する。2重投票は不正となることも明記が必要かもしれない。

これらについて選挙管理委員会を考える。

## Series 教授の横顔

## 消化器外科学 鈴木康之教授



日時 平成20年5月27日 (火) 午後1時～2時  
 於 管理棟3F応接室 聞き手 名誉会長 濱本龍七郎

**濱本** 本日は、お忙しいところ、お越しいただきありがとうございます。何度か予定が流れましたが、今回ようやく機会を持ってました。平成18年の6月に就任されて2年になられますが、神戸から来られて香川大学医学部の印象はいかがですか。

**鈴木** 色々な違いがありますが、神戸大学と違って、土地に余裕があって学生がスポーツするにも環境がいいですし、大学が創立されて27、8年経ったことで歴史も感じます。自由な空気が流れていて大学らしい大学だと思います。

**濱本** もう新設ではなくなりましたね。

**鈴木** 問題は、マンパワーの不足ですね。

**濱本** 少ないと思いますね。外の大きな病院から要望があっても出せないでしょう？

**鈴木** 関連病院は一応バランスはとれています。ただ、今、あちこちの大学が小規模の病院からどんどん医師を引き上げていっているため、人を出してくれという依頼が結構来るんですが、ちょっと対応できない状態です。この状況が続いたら、どんなにいい環境で、どんなにみんな頑張ろうと言っても限界がありますね。しかし、卒業生がちょっと残り始めたので、今後人が増えてくるのが期待できます。

**濱本** 学生に対する印象はいかがでしょう。

**鈴木** 非常に素直で明るいですね。まじめで、勉強もよくするし。若者らしいし、良いと思います。全体としてよくまとまっているように思えます。

**濱本** 1年の間は本学に行くようになったので、昔に比べると仲間意識が若干薄くなった気もしますが。

**鈴木** まあ、比較の問題ですけれど。前任地では都会の真ん中でみんないろんなことをやっていました。町中を外れているためかわかりませんが、1学年全体の仲間意識はこちらのほうが強いと思います。

**濱本** 先生は昭和58年にご卒業後、消化器外科をご専門とされ、平成2年に留学されて後は臓器移植にも熱心に取り組んでいらっしゃいますが、研究ならびに教育に対するお考えをお聞かせ下さい。

**鈴木** 教育から言うと、学部学生の教育はカリキュラムがしっかり出来ているので問題ないと思います。しかし、いくつかの診療科では大学院教育は問題だと思いま

す。それも、マンパワーが少ないからですが、何年か研究に専従するということがなかなか出来ない状況です。

**濱本** 大学は、研究、教育、臨床の機関ですから、研究をしないといけないですね。

**鈴木** 私の科では臨床が8割、9割になってしまっていて、1、2割が教育と研究なので、人数のいるところになかなか太刀打ち出来ないですよ。まとまった良い研究が多くは出来ないの、研究に関しては、この大学の現状はちょっと厳しいところがあるのではないのでしょうか。それを表してるのかどうか、科研費の採択率なんかもずっと落ちてきてますしね。

例えば旧帝大なんかと同じことをしていてもなかなか人が集まるような大学にはなれないので、大学がいくつかコラボレートしなければいけないと思うんです。特に臨床研究を一緒にやらないかと僕の教室が声をかけて、消化器外科系では四国4大学でこの間集まりました。徳島、愛媛、高知とどこも同じような状況下で、同じような気持ちを持っており、建設的な意見交換が出来たい集まりでした。一大学だけで症例を絞って検討しようと思ってもなかなかまとまらないですが、コラボレートすることで解決していこうとしています。他大学や、あるいは学内の他学部とのコラボレーションというところから方向性を見出していかないと、同じことをこぢんまりとやってもなかなか拉致があかないですからね。

**濱本** そういうところはあるでしょうね。大きいところでは人が多いから、臨床と研究に分かれて力いっぱいやれるわけですよ。

**鈴木** 5、6年前までは僕の母教室では大学院生を10人から15人くらいかかえていて、大学院時代も4年間、常に研究専従です。病棟は、研修医と研究期間が終わった人などがそれぞれやるといった感じでしたけれど、ここではもう、臨床、臨床で。良いことなのですが、若い人は、みんな早く一人前になりたいという意識が、特に臨床に関して高いですね。それはどこの大学の若い人でもそうでしょう。逆に研究に対する意識があまり無いですね。みんなもう少し、リサーチマインドみたいなものがあったらいいかなと思います。

**濱本** リサーチマインドの絶対数は少ないですね。

**鈴木** ほくの教室のみんなも、朝は7時から晩も11時

くらいまでよく頑張っていますが、病棟にいる時間が殆どです。ちょっと時間があつたら研究室に足を運ぶかとか机に向かって論文を書こうとか、そういう余裕がないのかもしれませんが、必要なことだと思います。

**濱本** 何が残るかといえば結局業績ですからね。

**鈴木** 僕ら外科の医者に論文ばかり書けとは言いませんが、大学にいたらそれが出来るような環境が欲しいです。しかし、人が少ない状況で臨床を待たなしでやるので、そこをどうするかですね。勿論人を増やす努力をしないといけないわけですが、卒業生がちょっと残り始めたから少し変わってくるかもしれません。臨床研修制度が始まった時、地方大学から中央にどんどん人が流出していきました。最初はどこも研修医を可愛がってくれるんだけど、3年経ち、5年経ちすれば肩たたきがあります。次が来ますから、そんなにいつまでも抱えていられないし、研修医の給料のままで雇えない。それもあって、学生はある程度母校に残って足元を固めてそこから出張という形で勉強していこうという意識が高まってきたのではないかと思います。

**濱本** 今、研究ができる卒業生は非常に限られていますよね。

**鈴木** 意識の問題だと思います。そんな特殊な能力や頭の良さなんか要らないです。何か、日常の臨床例を見た時に感じることなどがあつたら、それを実験的に証明できないかとかね、そういう意識のある人の絶対数がちょっと少ないということでしょう。

**濱本** 母校出身の教授が3人誕生しました。

**鈴木** 学問的にも人格的にも大変立派な教授ばかりで嬉しく思います。ナショナリズム優先はいけませんが、他の候補者と互角に戦える人を育成して行って今後も増えていけばいいと思います。

**濱本** 今、先生は学内でコラボというか、臨床研究で一緒なのはやっぱり3内ですか？

**鈴木** 3内も当然そうですが、1内とは臓器移植などで今後コラボしていきたいと思っています。

**濱本** 臓器移植は積極的にやったら出来るのですか？

**鈴木** 出来ます。ただ、移植医療はなんでもそうですが、病院全部が協力体制を敷かないといけません。感染、検査、薬剤などの全部の協力の上でのことなので。移植手術自体はそんなに難易度の高いものじゃないけれど、その後、きちりとした管理をしていく必要があります、外科だけではうまく出来ません。

**濱本** 臓器移植の施設はどのくらいあるんですか？

**鈴木** 今、全国で15くらい実施施設があるんですが、ここも施設認定を受けようと準備をしています。いざ実施する時は、大学、病院全体に協力いただいて実施します。臓器移植は、実施施設が四国では無いので、する意義は大きいです。新しくはないのですが、やっぱり大学らしい、意義のあることをやっていきたいと思っています。そういうことがたくさん出てこない、一般病院とどこが違うんだということになってきます。

**濱本** 是非、やっていただきたいですね。ここは、臓器移植はスタートが遅かったですね。

**鈴木** しかし、大学が出来てまだ二十数年ですから、最初の10年、15年はなかなか大変だったと思いますよ。遅れてスタートしても、僕は別にいいと思います。蓄積は少なくとも、やり始めると色々な問題が出てきますから、いろいろと新しい工夫をして新しい情報や考え方を発信していったらいいと思います。

**濱本** 是非、臓器移植をやっていただきたいと思えます。折角、腕を持たれてる先生がおられるんですから。最後に、同窓会に望まれることをお伺いします。

**鈴木** 母校の発展のためにマンパワーを増やすよう、大学に協力していただくことが一番です。

**濱本** 非常に楽しく時間があつという間に経ちました。お忙しい中ありがとうございました。

#### コラム：セブン・ドラゴンの「教授の横顔」

大らかさの中に、緻密さのある外科医らしいすがすがしいお人柄で、あつという間の1時間でした。研究に並々なめ意欲をもたれ、臨床もご自身のされたオベは全てメモされてあり、全て記憶されている事に大変感心いたしました。今後何度もお話を伺いたいものです。

同窓会名誉会長 濱本龍七郎（昭和61年卒）

速報

平成20年度 研究助成金、研究奨励金 選考結果

部門	受賞者	研究題目
研究助成金	人見浩史 (平成8年卒) 香川大学医学部 薬理学講座	減塩治療における局所レニン-アンジオテンシン-アルドステロン系の関与の検討
研究奨励金	内藤宗和 (平成14年卒) 東京医科大学 人体構造学講座	マウス自己免疫性精子形成障害発症に関わる精子・精子細胞の自己抗原タンパク質の同定とその局在の解析

第4回(平成20年度)香川大学医学部同窓会讃樹會研究助成者ならびに研究奨励者が決定しました。

今回、全4件の応募に対しまして、12名の外部評価委員によって厳正なる評価が行われました結果、研究助成部門(応募1件)では人見浩史先生が4.17点を獲得、研究奨励部門(応募3件)では内藤宗和先生が4.15点を獲得し第1位となりました。(平均点:4.01点/5点満点) 理事会において人見浩史先生に金壹百万円、内藤宗和先生に金五十万円を授与することを正式に決定しました。両先生には、心よりお喜び申し上げるとともに、御研究の益々の御発展をお祈り申し上げます。

外部評価委員の先生方におかれましては、大変お忙しい中、無償で御協力頂きましたことを誌上からではございますが、感謝申し上げます。

讃樹會研究助成 学外評価委員

臨床科

1	伊藤 貞嘉	東北大学大学院医学系研究科 内科病態学講座 腎・高血圧・内分泌学分野 教授
2	香美 祥二	徳島大学医学部医学科 発生発達医学講座 小児医学 教授
3	岸本 武利	大阪市立大学大学院医学研究科 泌尿器科 名誉教授
4	成瀬 光栄	京都医療センター 内分泌代謝センター 内分泌研究部 部長
5	森田 潔	岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 麻酔・蘇生学講座 教授(兼附属病院長)
6	吉栖 正生	広島大学大学院医歯薬学総合研究科 創生医科 専攻探索医科学講座 心臓血管生理医学 教授

基礎科

1	梶谷 文彦	科学技術振興機構(JST)主監/ 川崎医科大学名誉教授/岡山大学特命教授
2	島田 眞久	大阪医科大学 名誉教授
3	西堀 正洋	岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 機能制御学薬理学 教授
4	藤田 守	中村学園大学 栄養科学部 栄養科学科 教授
5	三浦 克之	大阪市立大学大学院医学研究科 薬効安全性学 教授
6	森田 啓之	岐阜大学大学院医学系研究科 神経統御学講座 生理学分野 教授

(敬称略)

平成20年度第1回 国外留学助成金 選考結果

滝 正徳 (平成10年卒) 善衆会病院 群馬スポーツ医学研究所

留学先機関: Fowler Kennedy Sport Medicine Clinic The University of Western Ontario

留学期間: 平成20年8月~平成21年7月

研究課題: ①膝関節の靭帯再建・半月板修復術における新鮮凍結死体を用いた解剖学的研究

②膝半月板再建術の研究 ③スポーツ整形外科の臨床研究

助成額: 167,900円

【受賞のコメント】

本奨学金を受領するにあたり、讃樹會の皆様には心からお礼申し上げます。資金のやり繰りが留学に際して大きな懸案事項でしたので、大変な難く、大事に使わせて頂きます。学生の頃から、いつかは海外で勉強したいと考えていましたが、医師歴11年目を迎え、やっとその機会を得ることができました。当方の留学はFowler Kennedy Sport Medicine Clinic (Canada)での臨床留学です。診断・手術法や怪我をした選手のマネージメントを学ぶのはもちろんですが、海外の病院で実際に働くことによって、国際的な医療センスを身に付けたいと思っています。清元先生。学生の頃に英語や留学の御指南をして頂いたのになかなか報告ができないことをずっと負い目感じていました。やっと行けます。不安はいっぱいですが、武士道・国家の品格・先生のサインが入った留学の本の3冊を大事に持って頑張ってください。



松本謙介 (平成12年卒) 香川大学大学院医学系研究科 分子情報制御医学

留学先機関: Cedars-Sinai Medical Center, University of California-Los Angeles

留学期間: 平成20年7月~平成22年6月

研究課題: 成人ALLのSNPを解析し、化学療法に対する感受性を層別化する。

また、成人と小児のALLの遺伝子異常を比較し新規予後因子を探索する。

助成額: 225,000円

【受賞のコメント】

この度は、讃樹會国外留学助成金に選考いただき誠にありがとうございます。私は2000年に本学を卒業後第一内科に入局し、主に血液学を専門とし臨床及び研究に従事しておりましたが、本年7月より米国ロサンゼルス市のCedars-Sinai-Medical-Centerにて血液腫瘍の基礎研究を行う機会を得ました。思えば卒業後すでに8年の月日が経過しましたが未だ一人前の臨床家、研究者には程遠くあらためて医学の奥の深さや継続的な鍛錬の必要性を痛感しております。第一内科におきましては臨床および研究において、石田先生、大西先生、村尾先生をはじめ多くの諸先輩方に貴重な御指導、御鞭撻をいただき厚く御礼申し上げます。今後は讃樹會国外留学助成金受領者の名に恥じぬよう、本学の発展に少しでも寄与できる様精進していきたいと考えております。



## 支援 本院卒後臨床研修に、引き続き多面的サポート

送迎バスの費用負担から、受賞者へのトロフィー、副賞の提供、説明会参加者へ軽食の用意等、同窓会は、様々な支援の形で、主催者と参加者のモチベーション高揚に一役買っています。

### ●新研修医歓迎会 4/1



香川大学医学部附属病院卒後臨床研修センターの20年度新研修医38名の歓迎会が、4月1日（火）に高松市内のホテルで催されました。研修初日のオリエンテーションを終えた研修医に、石田研修センター長、松原専任講師、指導医、先輩研修医から熱い歓迎の言葉が送られ、研修医としての2年間でスタートしました。新研修医からも、研修に向けての決意が表明され、和やかな歓談を通して先輩医師と新研修医の間に強い結束が生まれました。

### ●研修医発表会 4/10



記念すべき第一回かがわ卒後臨床研修研修医発表会が全日空ホテルクレメント高松で開催され、100名近くの参加者による盛大な催しとなりました。

香川県内で卒後臨床研修を受けた2、3年目の先生によって、研修中に担当した症例について8演題の発表がありました。1人あたり10分程度の持ち時間で発表が終了後、同窓会の高橋会長から、発表者全員に表彰状と副賞が贈られ、更に最優秀賞に選ばれた先生にはクリスタルの

トロフィーが贈呈されました。

「研修に役立つCKD治療のポイント」と題して香川大学医学部附属病院循環器・腎臓・脳卒中内科病院准教授の清元秀泰先生による特別講演も行われ、発表会後は、引き続き情報交換の場として懇親会が催されました。



### ●医学科5年生6年生と本院研修医・指導医との懇談会（報告）5/12

卒後臨床研修センター専任講師：松原 修司（7期生）

平成21年度プログラムに関する懇談会を平成20年5月12日に臨床講義棟で開催いたしました。前回同様、同窓会からの資金援助により、軽食を用意することが出来たことをお礼申し上げます。おかげさまで、5年生・6年生 計98名の参加がありましたことをご報告いたします。

まず、本院の卒後臨床研修の説明、医師としてのライフプラン等、本院のプログラム説明、マッチング申請書類等に関して、スライドを使用しながら詳説しました。

その後、卒後臨床研修センターOB3名および現在研修医の7名の近況や本院での研修内容等、大学病院のメリット面についての説明がありました。学生さんは、OB・研修医の意見に真剣に耳を傾けていました。

夕食時の2時間余りの懇談会ではありましたが、同窓会よりご提供頂いた軽食・飲料水のお陰で、充実した会にすることができましたこと、厚く御礼申し上げます。

卒後臨床研修センターでは、今秋（平成20年秋、5年生対象）にも再度、説明会の実施を予定し、本院卒後臨床研修を後輩にアピールして参ります。今後とも、当センターの卒後臨床研修活動へのご支援を賜りますようお願いいたします。



学生の国際交流助成 ▶▶▶



ヨークの街



バッキンガム宮殿にて



サッカー場

University of Newcastle upon Tyne

6年 高濱 隆幸

1. 学習状況について

ニューキャッスルにある、General Hospital, Freeman Hospital, RVIという3つの病院で臨床実習を行いました。6週間のプログラムの中で、Oncology (腫瘍科)、Infectious Disease (感染症科)、Lower GI Surgery (下部消化管外科)の3つの科を2週間ずつまわりました。実習では、日本と同じようにtime tableが渡されて、外来・病棟・手術を見学する場合もあれば、一日何をやっても良い、という日もあり、そのような場合はその日に行われている検査や病棟業務に自らが積極的に参加することが求められました。採血や留置針を入れることは学生実習でもやってよいことになっているようで、機会を与えていただきました。担当患者、というのは決まっていますが、興味深い症例やコミュニケーションをとりやすい患者さんのところへ行って病歴聴取の練習を行いました。



外科研修

高濱君

2. 生活状況について

今年は例年と違い、ニューキャッスル大学医学部の学生がHouse Shareをしている宿舎に泊めてもらうことになり、そこで友人ができたことは非常に貴重な経験となりました。物価が高かったため、食費や日用品を買うのに思ったよりも費用がかさみました。しかし、医師や友人と市内の飲食店で交流する機会もあり、よい思い出も作れました。それから、週末を利用して、列車でイギリス国内の都市へ旅行することができました。

3. 後輩へのアドバイス

香川大学医学部で学んだ内容で、イギリスに行って役に立たなかったことは何一つありませんでした。technical termを一つでも多く知っておくことが理解・コミュニケーションを非常に助けると感じました。英語を話せることが重要ではなく、医学的な知識とモチベーションがあれば、それを伝えるのに必要な英語が後からついてくる、と実感しました。

4. その他

今回の留学にあたり、大学にいらっしゃる先生方、先輩方に大変御世話になりました。この場をお借りしてお礼を申し上げます。ありがとうございました。

6年 丸山 和典



丸山君

感染症チームのドクターたちと

1. 学習状況について

イギリスのポリクリは日本と違い、学生が自由に何でも出来る時間が多い。その時間で現地の学生は患者さんの病歴を取りにいたり、身体所見を取りにいたりする。そしてそれをドクターにプレゼンテーションすることで力を伸ばしている。日本のポリクリに比べて、より実践的な教育だが悪い言い方をすれば放ったらかし。自分から常に問題意識を持って取り組まなければ何も学べない。その反面、やりたい事や分からない事はドクターに伝えればほとんど相談に乗ってくれる。日本より学生の実習で出来ることの範囲は広いと思った。始めは、慣れない環境や言葉の壁のせいで



受身の姿勢になってしまい、戸惑ったが慣れれば要求しただけやらせてくれるので楽しかった。

## 2. 生活状況について

今年は例年の学生寮に空きが無かったので、現地の学生と一緒にフラットと呼ばれる一軒家に滞在した。食事が無く自炊をしなければならなかったが、値段が寮より安く一緒に住む学生と英語を喋る機会も多かったことが良かったと思う。

## 3. 後輩へのアドバイス

現地のドクターに日本の医療事情を聞かれることが多かったため、知っていないと恥をかくことがあるかもしれない（僕が沢山恥をかけたので）。英語力の多少の不足よりも伝える内容が乏しいほうがよっぽど恥ずかしいです。日本のポリクリのように決まったスケジュールというものがないので、自分のやりたい事や見たい事をどんどん要求すると思う。だめでも大概のことは許可してもらえ。日本では患者さんからの採血や身体所見を取ったりすることがあまり出来ないのでも楽しくて、出来るだけ多くこなそうと心がけた。でも後で考えると、これらの事はいずれ日本の臨床研修ですることになるので、今はもっとイギリスでしか見ることの出来ないものを見たり体験したりするよう心がけるべきだったと思う。医学英語が分からないとカンファレンスなどは理解出来ないの、今のうちから日本語で学んだ事を英語でも憶える習慣をつけると役立つと思う。

## 4. 最後に

イギリスで病院実習をして、自分の知識や技術のなさを痛感した。同時に自分自身の力をグローバルな基準で客観的に見る事が出来るようになったと感じる。また、現地で会った友人とも連絡を取りあって将来再会したり、お互いを刺激し合って医師として高めあっていけたらいいと思う。

今回の留学で沢山の事を経験し学びました。留学の準備を助けてくださった先生方、また同窓会の皆様に感謝したいと思います。ありがとうございました。

### 6年 大橋 奈尾子

こちらでの実習は自分次第で忙しくもできるし暇にもできる。先生達は基本的に何も誘ってくれないので、自分が見たいものややりたいことがあれば自ら積極的に動かなくてはならない。初めはそれになかなか慣れず、とまどうことが多かったし、そもそも英語を聞くことで精一杯だった。しかし逆を言えば、自分がしたいことを先生に相談すれば極力やらせてもらえるのでとても満足のいく実習を行うことが出来る。私は自分の能力を磨くだけではなく、日本とイギリスでの外来



学生寮のルームメイトと寮のキッチンでバースデーパーティーをしました。

風景や治療方法の違い、医学教育の違いを観察することができ、またそれらを話し合う仲間がたくさんできたことにとっても満足している。

英語に関しては、やはり初めはイギリス英語になかなか耳が慣れないので大変だったが2週間もすると大分聞き取れるようになってきた。しかし私は4週間後くらいには自分の英語力の限界を感じ、また小児科では知らない単語が多すぎてとても大変な思いをした。それでも、自分の拙い英語を理解しようとしてくれるたくさんの仲間がいてくれたおかげで6週間本当に充実した生活を送ることが出来たのだと思う。

これからイギリスへ留学する人たちは、やはり早いうちからイギリス英語のリスニングを始めるのが良いと思う。特にニューキャッスルの患者さんやスタッフはみんなGeordie Englishを話すので初めはなかなか苦労する。ニューキャッスルは基本的に寒い日が多いし、雨が多いが、日が長いので実習が終わってからでも外を散歩したりできる。Castle Leazesでは一年生の子達と楽しく過ごせるし、イギリスの食事を思う存分堪能できると思う。

とにかく、私は今回イギリスで実習するという道を選んで本当に正解だったと思う。私は以前カルガリーの留学にも参加させていただいたが、そのときは内容も環境も文化も全く異なるので、今回は今回で多くを経験し、多くを学ぶことができた。



General Hospitalで一緒に学んだ医学生達と

大橋さん

## 支部会／同期会

### 昭和63年卒（サンフラワー会）

清元 秀泰

去る3月14日（金曜日）、平尾先生を幹事に20年ぶりに同期の昭和63年卒の懐かしいメンバーに邂逅することが出来た。遠方より、中根先生（長崎大学医学部精神科准教授）が高松に来るということで、無理やり集まったというところが、いかにも63年卒というバブル時代の同窓会である。出席者は14名と寂しい面もあったが、急に会を設定した中で、皆、都合をつけて集まってくれました。

誰がどこに異動になった、誰と結婚した、頭が禿げた、訴えられた、など話題は様々だが、むしろ当時はあまり話さなかったグループの人たちと打ち解けて、20年という年月を懐かしんだ。開業医になった先生やこれから開業する先生、勤務医で頑張る先生など、それぞれの立場でのコツや人生の苦悩を吐露できるのは、

ちなみに、皆の一番の話題は町井先生の音信でした。そして、皆のリクエストとして「次回は町井先生のご家族ごと呼んで欲しい」との希望がありました。次回開催には宿泊準備も行いますので、更に遠方の同窓が一人でも多くご出席していただけることを願っています。



やはり同期ゆえの集まりだからなのであろう。学生時代の恩師の話から、出席していない同級生たちの話題と、最後には学籍番号順に皆が知りうる音信を「あーでない、こうでない」と、酒の肴にしてひとしきり夜中まで飲んだ。結論として「また、もっと人を集めてやろうぜ」、という前向きな会でありました。

でも「次回も参加しないと、酒の肴にされてしまう」という想いもよぎるので、次回も必ず参加しようと決意した会でもあります。



## information

## 第7回関東支部会開催のご案内

日時：平成20年11月15日(土)

午後6時半より

場所：東京さぬき倶楽部

港区三田1丁目11-9

Tel 03-3455-5551

会費：一万円程度



関東支部会員のみなさんにはご案内と返信用封筒が同封されていますので、出欠を返信下さい。

更に関東支部会員に限らず、飛び入り参加歓迎です。ご希望の場合は、事前に事務局までご連絡下さい。

◇ 一同窓で集まる際には、懇親会助成をご利用下さい！ ◇

### 支部会や同期会 etc には 助成があります！

久しぶりに同窓で集まって、互いの近況話に花を咲かせませんか？

連絡事務全般を事務局がお手伝いします。

該当者の宛名ラベルの用意から、案内状の作成、発送、支部会会員名簿作成、ネームプレート準備等の事務作業を事務局で行います。

更に、郵送料や返信はがき、案内状作成にかかる費用は、讃樹會支部会費から全額助成致します。

まずは、下記までご連絡下さい。

讃樹會事務局 087-840-2291

利用しよう！

### 懇親会事業援助金制度

- 同窓の懇親会・支部会・同期会（学年会）同窓会主催の祝賀会等の開催に際して、参加者が10名以上の場合1名あたり3,000円の援助を行います。
- 幹事の方は開催日時、参加予定人数などを開催1週間前までに事務局に書面で通知して下さい。また、開催後は報告書を提出して下さい。同窓会誌に掲載させていただきます。
- 会の規模が大きい（参加予定者が30名以上）場合、理事会の承認をもって、特別に補助額を増額できます。
- ご連絡下さい。申請書フォームをお送りします。



学内ニュースの窓



▲祝辞を述べる  
清元会長代行



▲祝賀会会場



## 門出の日

### —卒業—

3月24日 抜けるような青空のもと、医学部医学科第23期生89名全員が晴れやかに卒業を迎えた。

当日は、幸町の香川大学講堂で6学部と専攻科、大学院の計1572名の卒業式が執り行われ、各学部の総代に一井学長から学位記が授与された。

この日、医学部卒業生は卒業式、祝賀会、医学部キャンパスでの壮行会、謝恩会と4つの会場を移動するため、終日多忙を極めた。

まずは、式典終了後、医学部及び後援会共催の祝賀会会場である高松国際ホテルへ移動し、医学部長から卒業生一人一人に学位記が手渡され、父兄をまじえて歓談、記念撮影が行われた。

次にバスでもどった医学部では、待ち構えた後輩に胴上げや花束の祝福を受け、キャンパスのいたるところでお祝いの歓声が響いた。

最後は、恩師へ感謝の意を込めて卒業生主催の謝恩会がリーガホテルゼスト高松で開催された。

会場では、卒業を記念して、讃樹會清元秀泰会長代行から、謝恩会への寄附と、新しい門出に激励の気持ちを込めて全員にネームペンが贈呈された。

また、在学中最も心に残る先生を卒業生全員の投票で決める「Outstanding Teacher of the year」には、脳神経外科の田宮隆教授が選ばれ、表彰式が行なわれた。

同窓会は今後も、謝恩会が栄えあるよき日を締め括るにふさわしいイベントとなるように応援します。



▲卒業式で医学部の学位記授与のため起立



◀“Outstanding Teacher of the year”田宮隆先生

▼謝恩会受付







Tel&amp;Fax 087-840-2291

E-mail dousou@med.kagawa-u.ac.jp

### ● 会員情報の確認と、異動連絡のお願い

同封の会員情報をご確認いただき、変更がありましたらご連絡下さい。連絡方法は、「異動届」、メールのいずれでも結構です。当面は会員名簿の作成は予定しておりませんが、異動につきましては必ずお知らせ下さい。

お知らせいただいた異動は、同窓会の最新の会員情報であるだけでなく、大学から勤務先状況等の統計資料作成の依頼や、部活動からOBの連絡先の問い合わせなどに対する貴重な情報源となります。

同窓会会員の個人情報につきましては、「讃樹會個人情報取扱に関する基本方針」に基づいた管理を行いますのでご協力をお願いします。

### EVENT

◆第29回香川大学 **医学部祭** 開催  
「百香繚乱～咲き乱れろ青春！！」

平成20年10月10日 (金)

11日 (土)

12日 (日)

◆香川大学同窓会連合会

**ホームカミングデー 開催**

平成20年11月1日 (土)

詳細は連合会HPまで。

### 電話詐欺情報

栗林病院の医師で小林と名乗る男性が、同窓会の役員のフリをして、本人の個人情報や同窓生の連絡先を聞いてくるということがありました。

◆讃樹會事務局には男性はいません。

◆讃樹會の役員の先生が電話で同窓生の会員情報を問合せたりはしません。

同窓生のフリをして、結婚式の2次会の案内がしたいと、連絡先を実家に聞くということがありました。

◆「ふだん、あまりつきあいはないけれど、たくさん同窓が集まるいい機会だから、結婚式の2次会の案内を出したいので連絡先を教えてください。」

学生時代に所属していたクラブ活動を知っていたり、他の同窓生の情報を知っていたり、その上、非常に親しみやすい口調で、信じるように仕向けた会話を進めます。

電話を受けた実家の方は、最初から詐欺と思っているもだんだん本当ではと思って来る、とおっしゃっている方が多いです。

## 診療科だより

香川大学医学部附属病院東病棟 3階 呼吸器・乳腺内分泌外科



## 呼吸器・乳腺内分泌外科の荒唐無稽的紹介

横見瀬 裕保：教授

宙船 (中島 みゆき：作詞、作曲)

その船を漕いでゆけ おまえの手で漕いでゆけ  
おまえが消えて喜ぶ者に おまえのオールをまかせな

その船は今どこに ふらふらと浮かんでいるのか  
その船は今どこに ボロボロで進んでいるのか  
流されまいと逆らいながら

船は挑み 船は傷み

すべての水夫が恐れをなして逃げ去っても

その船を漕いでゆけ おまえの手で漕いでゆけ

おまえが消えて喜ぶ者に おまえのオールをまかせな

(後略)

こんな感じで10年間頑張ってきました。第二外科初代教授前田先生を引き継ぎ、現在は科名も呼吸器・乳腺内分泌外科と変わり、専門性を高めています。現在、医局員は27名、そのうち15名が大学に属しています。関連施設は高知医療センター3名、倉敷中央病院2名、神鋼病院2名、日本赤十字社和歌山医療センター2名、天理病院1名、彦根市立病院1名で地域医療に関わるとともに、自分の技術の研鑽に励んでいます。またトロント大学に1名留学し、移植・再生医療を研究中です。

我々の科の目標は“自分の愛する人に行う医療をアート(卓越した技術)、ハート(思いやり)、サイエンス(科学的根拠)をもって患者さまに提供することです。突き詰めると世界水準の治療をこの地域で実践し、広めていくことです。

病棟は東3階に40床あり、肺癌、乳癌、甲状腺癌などの外科的治療を行っています。関連分野の手術数は10年前の約2倍となっており、総手術300例、肺癌90例、乳癌50例、甲状腺癌30例前後です。進行癌には積極的に導入療法を

行っています。癌関連遺伝子の検索を早期から行い、テーラーメイドの化学療法を心がけています。早期症例に対する内視鏡手術にも心がけています。大学は急性期医療を実践する場所ですが、再発・末期の患者様にも最良の医療が提供できるようにしています。私は谷村新司氏の“群青”を愛唱しています。

手折れば散る薄紫の

野辺に咲きたる一輪の

花に似てはかなきは人の命か

(後略)

はかない命に最初から最後まで心を込めて最高の医療を行うのが我々の使命と考えています。

大学に在籍する以上、研究は権利であり、義務であると考えています。何も東大を、京大を目指す必要はありません。香川大学医学部呼吸器・乳腺内分泌外科の研究を行えば良いと考えます。我々のグループはこの10年間で基盤B:5件、基盤C:10件、萌芽:5件、若手B:1件を獲得し、総額は1億1千8百万円に上りました。癌、再生、診断分野で世界に発信する優れた論文を多数、輩出しました。教育も重要な課題です。私は考え、仮定し、行い、結果が出、それをうれしい、楽しいと思う過程が大切であることを教えてきました。私自身、決して忘れてはいけない“感覚”と思います。

最後に、肺、乳腺、甲状腺に興味のある同窓の皆様、是非一度教室を訪ねて来て下さい。あてもない夢を追い続けるのはばかっていますが、夢のない日常は味気ないものです。夢を見続ける DREAMER であり、夢を実現する DREAM MAKER であり続けたいと考えています。みんな夢を見ようぜ!